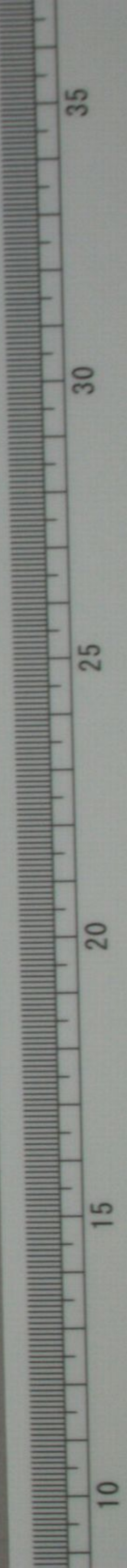


昭和十三年三月起筆

戊寅座右錄

二

特別
14
1919
492



の此と存中懐慨する人々あり也。

○西洋人が日本に未だ進まなかつたのは女性に對しての優遇にある亦日本
我家庭の實相であるが、いふに及ぶことが容易いといふ。と云ふの
彼等の先入成見が、（中略）。邪惡を
するに、西洋人が概して西洋婦人より輕蔑する潜在意識を備
へてゐるからである。西洋人が日本に未だ或る時代まで或人と女性
とを区別することが出来なかつたのは、彼等が僅かに見たの「蕪」妓の如く
あつた。今も女性解放を云へてウエートレスとして、デパートや喫茶店
又三輪車にのりあつたり、目も觸れなかつたが、元來の外國の如く、
理解があるといふのは、彼等が東洋に於て日本に對する男尊女
卑の固執を思はせる。其れが日本の女性に無知識の
男子の奴隷であるといふに、彼等外人は日本の内容を就て何ら

も知らぬ中、女性に對しての如く無理解である。また其
笑、日本の女子は長い間家庭に閉居し、外部に現はれなかつたから
かである。四野に芬動し、婦人をもつと持たず、外人の目に七輪
人だ、と云ふ、（中略）。外人と接觸し、（中略）。此等
此、日本の種々の文獻もあつたが、女性に關する文獻は割合に少
く、判せん外人の手引とあつたやうな文獻は極めて少くあつた。
他のも外人の日本の風俗を記したるものも、其他に於ける如く、現
在の女性に對する記事は、言はば断つて、最下級に屬する婦人
の醜態を叙するに過ぎなかつた。此等を讀み、外人は日本
女性の地位が如何に低く、（中略）。輕侮の念を起さし、（中略）。
過さるゝ。我國の女風俗が外人に於て程如何に、浮世

勢力が絶たれぬが、徳川氏の賢相が、**大**の改革を指し導く
といつて、失敗に終つた。手ごたしい敵手であつた。
世に、**大**の改革の苦勞の歴史もあつた。赤珠膜のあつたこと、
大の改革の苦勞の歴史もあつた。赤珠膜のあつたこと、
大の改革の苦勞の歴史もあつた。赤珠膜のあつたこと、

婦人の家庭の主婦として生活する。ぬくもりのあつた、青
児、**大**の改革の苦勞の歴史もあつた。赤珠膜のあつたこと、
大の改革の苦勞の歴史もあつた。赤珠膜のあつたこと、
大の改革の苦勞の歴史もあつた。赤珠膜のあつたこと、
大の改革の苦勞の歴史もあつた。赤珠膜のあつたこと、

徳川氏

のルーツが、**大**の改革の苦勞の歴史もあつた。赤珠膜のあつたこと、
大の改革の苦勞の歴史もあつた。赤珠膜のあつたこと、
大の改革の苦勞の歴史もあつた。赤珠膜のあつたこと、

以上の流風が、**大**の改革の苦勞の歴史もあつた。赤珠膜のあつたこと、
大の改革の苦勞の歴史もあつた。赤珠膜のあつたこと、
大の改革の苦勞の歴史もあつた。赤珠膜のあつたこと、
大の改革の苦勞の歴史もあつた。赤珠膜のあつたこと、
大の改革の苦勞の歴史もあつた。赤珠膜のあつたこと、

を元であらう。

日本といふと異つて久く女性が優位とすることを許せぬが、
男性が女を扱ふたか、いふ風には取替から生じたものか、
たうく、女が優位とせられた、是利時代の河國が歌よ
伎をやつたこと、若の寸定が、西洋の七日ある時
代より早く女性が舞台に舞つた例は無いやうである。

○ゆり園、東といふく、の地帯と縁談をわつた、朝比奈
知方の近縁後七女の競後の一ひある。相比奈のあつた
切のの時寺とあるは、とて、父くしめは、成る程、費もつた
あつた十九才、心、職、の、を、開、祖、の、寺、の、金、牛
め、就、て、こ、の、人、に、と、年、あ、て、め、知、あ、る、と、年、あ、の、坊、頭、奥、の
名、と、思、は、れ、る、金、牛、の、名、の、け、れ、名、が、智、と、あ、る、と、思、ふ
の、を、知、ら、ぬ、と、自、ら、改、め、れ、と、思、ふ、
●あつた、の、年、が、ボ、ツ、ク、教、の、こ、と、か、あ、る、あ、つ、た、門、の
流、れ、と、し、と、講、談、の、の、花、の、助、と、ん、は、と、思、ふ、二、人
の家、来、の、助、と、ん、の、作、と、宗、傳、が、此、人、の、傳、と、も、思、ふ、
あり、と、呼、ぶ、忠、臣、柿、氏、の、名、を、よ、る、と、力、を、入、ん、だ、り、此、人、が
あ、る、

を尋ね初く交の比字都官島野「先」と云ふアガチを以て
友人問ふ呼んたを云ふが、其の顔面か先を似てゐる何れ
と云ふらう。其の思ふことの中島錫胤男侍の京都侍
人中島櫻隠の子とある。其の素六の北人の眼を以て
北が其の田から其の空を以てと云ふかうらうら。尚初年
の川田慶江の子鷹「多く洋行して字を書家と云ふ
こと」印のものを北人の英法を傳つてと云ふ連名は英文
をもくも依れりあると云ふ根岸にお行亭と云ふ
唐が有りたこと記帳もあつた。其の書名も名
のありた金瓶大思の分筆が書人の筆を傳つてあること
を知つた。而國寺の風流は今如も知つてゐるが、大
徳流の初めを知つた所である。

東京製

凡の器は待合の軒端にそよそよ忍ぶ音 ともとの

音も人々入心 心を重くするの山登り小舟

宮以道三井上哲次郎と向宮で法林と云ふ人此の歌
マシメ人かあつた所時々漢詩を作つたが、可多う上手であ
つた。竹馬聲の断凡外寺、金釵影閃々、月半血の二句
は、蓮子のあの人待とい思はんる、艶情がある。宮崎の号を
津城と云ふ。

心術強めの木庵と時代を同の、木庵から云ふ、同宗と
云ふと、幼めく云ふが、友にさうら、又圓の物語を得て終始
した。嘗ての相根と静養と云ふ、龍山は凡の宗が似て居ると
云ふと、云ふ、小龍山と石三刻、凡の塔の塔の塔の塔の塔の塔
つてゐる。又嘗て又圓の者、後而院天皇と、備武と云

ハ想像以上あり、亦七十字架のありしもの有りとも思ふべし。
例ハ外圃の位置等々を以て、耶穌教徒長のありしもの外圃
との入り度後、彼等が所爲し、右のありしものありしもの
んとひとく思ふ場つに任か、祈りの書物や讃美
歌の、書籍等々を以て、皆封印して候かのに、ある
此等の事、就き當時彼等(意)に、このこと、左の如く
しあり

し名高木作右工門殿が、本年行り、冬、来り、次の書付
を讀みたまへん

オラシガ、甲比丹、其配下、對し、陸上、ある時、又
船に乗る、航海する時、基督教の裝飾品を、日
本人、又、當地に渡航し、居住し、或は貿易を行ふ、及、那



人々の他の四民に、是れ、交換し、或は贈與する、と
す、其の民、及、外圃人の、而前、於て、右の品物を、用
ひて、儀式を行ふ可し、又、何人、其之を、爲すこと、
勸ふ、心、し、し、日、唯、或は、聖徒の日を、祝ひ、休、日、
する、可し、(一切の、不、幸、を、免、かん、る、爲、の、) 聖歌集
聖書、或は、基督教徒が、通、る、所、推、へ、る、類、似、の、書、籍
を、日本人、に、与、す、可、し、と、命、令、す、べし、
此、月、きの、時、ハ、ホ、ル、ム、人、の、如、く、(或、四、十、七、日、) べし
オ、七、月、三、日、(一、六、四、一、年) 長崎の、有、奉、行、り、又、も
一、六、四、一、年、八、月、二、日、條、ハ、外科、醫、長、が、死、去、り、
の、き、其、の、遺、骸、を、葬、し、し、と、死、出、せ、り、
教、徒、を、日本、の、土、地、に、埋、め、こ、う、と、す、
送、り、海、中、に、

其の翌年の地を色せたるうらむいどく寒氣を恐れた。紙法の
刑日服と云ふ肌襦袢股引、綿服、指織、こんじけで考へ
●人いんて寒の防を得るともすけんも、夏の日く蚊蚊の害を
着るもそのうら不足であつた。才一綿の入つた衣は前後七甚
此綿が着るるれりて其の温さを補ふ為め綿を添くる。昔
心以紙法の衣を穿たし所を以て綿を持てぬ校もそのとて
考へ此の日用の因人が考へし時、其の帝國の綿を聊か
後き取り、そんな未熟種織の温綿を補ひ、一時いどく厚く
補つた。毎夕入居房の印、衣類検査の紙を以て怪しき
はと注をいじりく補つた為め、豊かき綿入となるつたので
寒氣を凌ぎ得ルことを思ひ、綿の切の屑以上であつた
と云ふ。

標原製

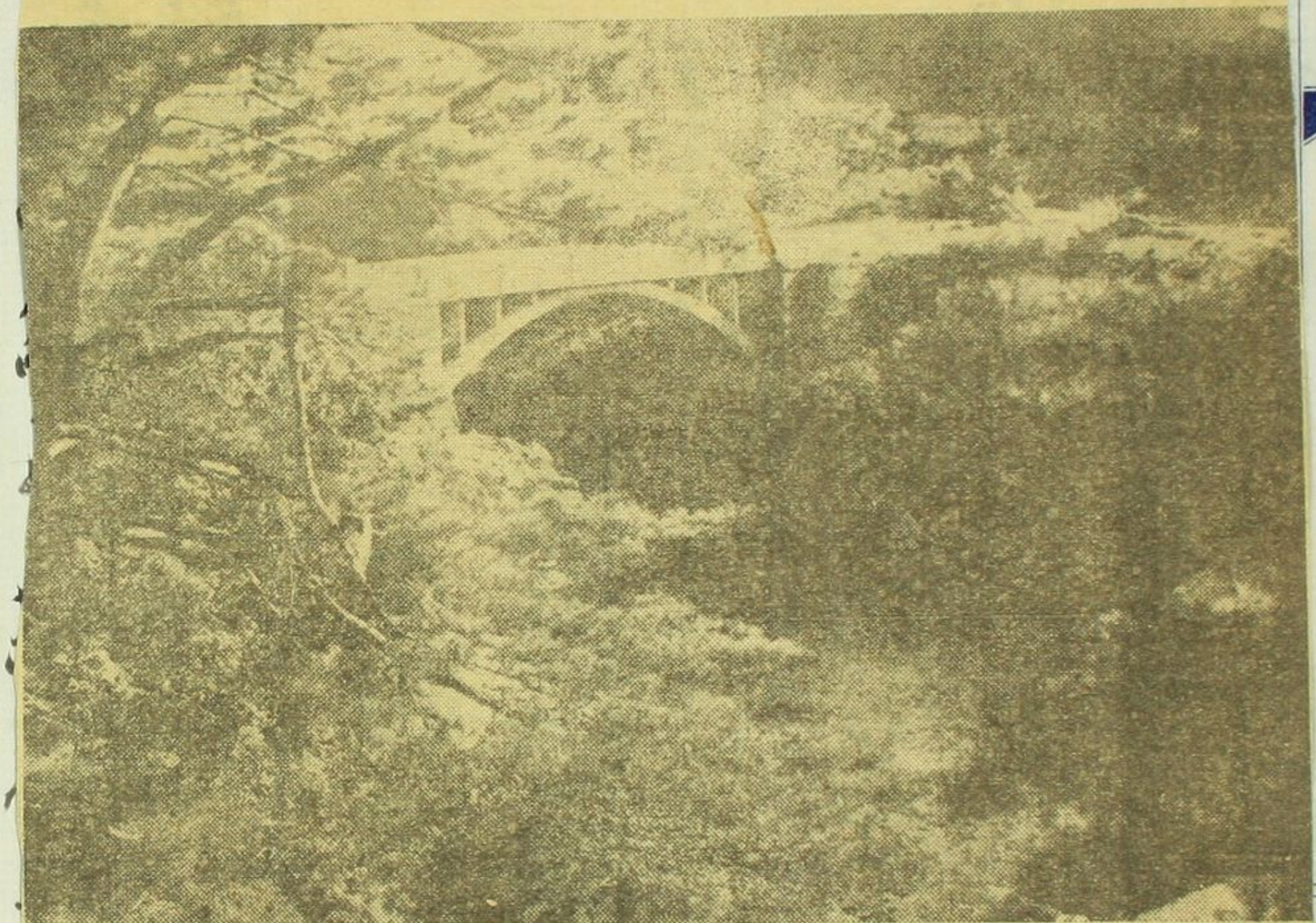
○杭州でも軍が下領した。この頃自給の地はあつた。又使徒
この頃此地はあつた。日本と種々の史的交渉のあつた。杭州は春秋
時代の都。杭州と云ふ名のは北の隋朝の時、日本と関係
が生じた。唐以後の事。日本が盛回が派した遣唐使は
初め山東の先端に上陸して長安に向つた。唐時代は、その
新羅が派山をる。日本船は朝鮮を経由せ
た。新羅を聞き難波の多岐多岐を過ぎ五島を經て杭州
に向つた。此後、船が多かつた。弘法大師が唐に赴き、
●彼を行き最澄も此後、赴いた。杭州は、其の白
樂天が杭州刺史とる。此のころ自然交りかあつた。洋の抗物
ハ佛法の成る。其のころ、宋代のころ、日本僧ハ佛法を
日本に弘め、考へ、終焉のころ、あつた。中が七

○俄後、いろいろの方言があるが、雪圍は、かろ雪の方言か、他五人
を解く難い、雪をエキと云い、かキと云い、か溜りの表面が
凍ると、サカが張つれ、と云ふ、水氣を帯ひ、此よの凍後、さ
と、こ、こ、の、北、東、え、凍、と、長、味、し、し、大、根、し、こ、豆、腐
さ、い、と、云、ッ、ラ、と、俄、後、の、カ、ナ、コ、ホ、リ、と、云、い、レ、ヤ、ハ、代、用
の、雪、探、い、と、エ、ス、キ、と、云、ふ、小、児、等、を、エ、ス、キ、ト、乗、つ、て、傾、斜
地、を、す、り、を、敷、ん、の、こ、ん、を、エ、ス、キ、と、云、ふ、雪、中、の、お、蔵
を、す、へ、し、り、キ、ア、ソ、ロ、と、云、ふ、雪、の、敷、ん、の、お、蔵、を、握、り、固
め、下、敷、の、凍、を、い、て、履、み、固、め、し、大、け、道、高、の、大、さ、さ、う、と、し
相、手、を、選、ん、い、互、い、丸、を、打、つ、合、ん、せ、る、最、後、の、お、蔵、を、割、ん、す
と、唐、ご、ろ、を、テ、ン、カ、(天、下)と、稱、す、此、の、雪、丸、打、を、エ、ロ、く、と、云
ふ、を、拵、え、此、の、こ、こ、く、入、就、て、の、音、信、が、面、白、い、エ、ロ、く、ナ、(世)



何れを太る、雪や氷や固子を、かろ雪と云ふ、折と陰と、こ、雪
を、固、の、さ、も、あ、る、サ、ウ、雪、が、徳、の、寒、氣、を、い、つ、つ、と、云
ひ、解、け、る、い、れ、上、を、液、く、ま、る、く、之、ん、を、シ、シ、ワ、タ、リ、(凍、雪、の)
と、云、ふ、傾、斜、地、の、凍、ん、上、を、す、り、下、こ、お、い、を、ズ、イ、ナ、と
云、ふ、と、云、ふ、高、け、化、し、い、ろ、く、あ、る、此、位、う、し、雪、七、の、怪、途
を、と、披、か、す、と、娘、十、七、雪、折、世、し、ん、今、朝、日、も、何、れ、か、把
と、ん、し、年、頃、女、と、春、降、る、雪、の、か、ろ、く、見、え、る、も、解、け、る、い
こ、ん、な、い、あ、る、

○以上の脚圍の雪の、さ、ち、い、て、あ、る、も、心、を、お、ろ、か、し、り、着、し、れ、の
を、え、る、と、杉、か、橋、の、圍、が、出、て、お、ろ、り、を、さ、り、か、し、く、感、ん、た、自、分
が、お、ろ、り、の、時、と、云、い、七、十、年、前、に、あ、る、が、戊、辰、の、歳、の、り
吹、花、と、お、け、を、あ、は、し、く、や、桑、在、の、祝、威、の、家、に、た、つ



世に奇勝 樽ヶ橋

羽越線中條驛で昨秋來計畫を進めてゐた同線から中條町羽黒觀音堂鳥坂山の羊駝路を経て黒川村胎内橋樽ヶ橋に至る往路五キロと樽ヶ橋から仁田野の松林地帯を迂回して中條に至る復路四キロのハイクル定コースは先月末新津運事で開催した主務者會議でいよいよ正式に決定と決定、中條驛で

は近く町商會及び有志に呼びかけ、呼びかけの座を設けて、開き具體的の開拓計畫を樹てる運びとなつた、新コースとなる羽黒觀音は往古城主中條の誇り、尊として郷民が信仰的となつてゐる靈城で鳥坂山は建仁の昔城氏の叔母板額前が勇の舊蹟で名勝樽ヶ橋は藤花で知られ甲州猿橋の奇勝を譽せしむる靈勝地である「寫眞は樽ヶ橋の奇勝」

いさゝか自分いさゝか心此初めは川系美を感心させられた
 此地の奇勝此橋いさゝか橋なるいさゝか奇勝山崖に架かる
 あつて橋と云ふ汗流筋橋の橋脚の形と橋の形と橋の形と
 奇勝の奇勝橋銘が起つたの奇勝橋の奇勝橋の奇勝橋の奇勝
 艾川を胎内川と云ふて、こゝに香飯が漁人の甲斐の猿橋の
 やうな深い淵を橋の奇勝の奇勝の奇勝の奇勝の奇勝の奇勝の
 奇勝の奇勝の奇勝の奇勝の奇勝の奇勝の奇勝の奇勝の奇勝の
 心もいさゝか引きつける趣がある、こゝの奇勝の奇勝の奇勝の
 鳥坂山と云ふ城の遺跡の建仁頃の古城跡がある、中
 條の古主中條氏が奇勝の奇勝の奇勝の奇勝の奇勝の奇勝の
 ともあつて、此處の山下一帯河を絶つて家伝する黒川驛

料理名のあつたものさへは、結構に食べた。さうして、長生殿
の長七ふさといふと思ふ。

○この入国して伊太利使節団が入来する前、沿道の汽車中
に、いづく感阿のり、ちや空を凌ぐ、戴白の富士山とあつた。後
等、互いさまい合ひて、一齊に、居裡家と起つて手を捧げ
て、進拜して、よくが、外人、日本、未だ先が、何もうか、人とも
の、北、雪山である。伊太利も火山國であるが、富士山、概して、
刺の、刺つた火山、後等を、と、珍しく、感せしめ、た、相違
る。日本、い、富士を形容するに、白芙蓉、た、か、倒さ、又、整、と、白
扇を、ちや、あ、る、か、いつ、を、や、世界、漫、遊、家、が、富士を、見、え、あ
手を、捧、げ、し、合、掌、し、て、あ、る、態、だ、と、云、つ、た、の、が、宗、教、的、の、形、容、が
あ、つ、た、^{（イタリヤ）}、富士と、云、ふ、山、名、も、或、る、人、が、普、慈、と、云、つ、て、あ、つ、た、の、と、白、

東京

分七後入。

○いつ、や、ヒト、ト、ラ、一、は、い、あ、る、か、ん、記、帳、す、る、が、日本、近、時、の、故、り、う
く、べき、文化、を、廢、め、た、揚、句、果、に、就、し、不、足、を、云、ふ、か、振、り、返、つ、て
昔、の、も、を、珍、ろ、う、と、い、ふ、と、評、し、た。卒、然、こ、ん、を、受、け、し、日本
人、に、對、す、る、頂、門、の、一、針、い、ち、あ、る、か、れ、も、思、ひ、ん、が、大、き、い、深、く、考、み
べ、し、こ、の、文化、の、驛、を、し、し、進、出、場、合、に、互、を、振、返、つ、て、餘、計
を、自、慢、と、す、る、も、ツ、シ、ン、ク、マ、ウ、レ、ク、ラ、に、拍、車、と、ち、け、を、進、出、が
よ、い、と、云、ふ、の、確、然、一、説、也、西洋、あ、つ、た、文化、國、に、敢、て、昔、し
を、凌、ぐ、ま、い。去、り、西洋、あ、つ、た、の、法、國、に、市、法、が、日本、と、異、つ、て、母
○こ、こ、云、ふ、あ、つ、た、文化、が、あ、つ、た、ま、い、時、節、は、一、切、の、事、も、後、の
べき、と、あ、つ、た、現、つ、て、あ、る、の、以、及、し、も、日本、の、こ、こ、云、ふ、文化、が、あ、つ、た、
存在、し、て、ま、い、か、つ、た、文化、を、神、神、一、切、つ、て、も、切、れ、る、い、ま、あ、つ、た、

□ せー久しくなればその一れめなれ心かたり
けん

夫ぬまいか村にぬ人七人の末娘

手なれりこほ七人のめいり

か村のよれりこれ屋よりとあらはるる

こらりよれりこれ村のよれり

去る此山伊くつ路ハ市山あくのぬれと

まじいづく路やまな河や末の終と

秋恋も久米ぬ此川の橋を

えはる路かんさす屋の能ことまれ

大にのりりしあまうそのまじい一なれ

まじいとそめやばあまらつる

不うこいむ之

長

○ 昔もさむいれり文章花を著しあつてそのかあるが、花
あひゆ冷二娘女性い同志の巻集家あつてそのまじいことゆ
いれり一人現在花をぬる後、ダンカの教授をやつて
る、花園歌女といふもの、その花の飾をいれ、
此女が無事の巻集書女、帝都、用儀さるる同志の
巻集、其巻を現して、そのまじいことゆ、いれ、
法、此女の飾を得る者あり、その巻と帯、
めいり、いれ、そのまじいことゆ、いれ、
その巻、そのまじいことゆ、いれ、
その巻、そのまじいことゆ、いれ、
その巻、そのまじいことゆ、いれ、

動かさず居ることを苦かする。田舎の人が早く老るるものハ刺激
かゝるのハ機械的運動を缺くからである。人ハ一歩を傷けても
医ある薬計りも醫くが、物事を傷け喪心して一歩構
るいともあらず。如斯の誤つてある。元来人間の機械を働かせる原
動力ハ心と心と在るが、心を閑却してどうして機械的の法
動かざるをいふ。自今ハ秩年輩の年輩は、
後進のあつた別々養生法をせつ居る。唯此血氣の以
或る軍柄から痛切に自愛の大切さを感じたことがあつて
是れから力と堪えぬことをやつのが身を亡はす所以と心得
加心加意の抱ふ大きき責任を荷ふことを避け、不滴千形
を發行し、
このハ其故である。自今ハ人ハ自保健法を問ひて、自

保身録

今の保健法の佛教の所謂大乗的此と云々、通例人の
つとめりハ小乘的保健の心的養生が閑却せられてある。是れが
為の肉体的故障の多い人が、あるの工口く死なす。大抵心的
故障は病をとりてあつた。自愛ハ大乗的養生法に
適合して機械を操持するに、自愛の効果を
生ずる。鏡後の復りも之に由らば、
又馳せん力地くわして、
このハ自愛の法である。亦愛の道である。

春宮日録

二十のばらりの

三月下旬と四月中旬の別。四月二日、病人あり、静
思事とある。法ハ唯耳目に觸る一端を
記す。こまが記すの多くハ隨筆の材料とす。

北次父の書字を帰つてこれ父の心づいた佛像を見て白く書
の満ちる所を絶つて置いた父が是を感して
と動向を説いたところエヒリトがある。又字流の風
風の裝飾回を施す所成る命に所為成るこ
たうして成るは風風を主軸通に書くは其の速
成を難しと云ふ如き、草書漸上と云ふは、楷法に
度あることか、頗る引倒したる例がヤク
くさう。

古今天心歴代は美術を左の特徴より區分して
あり。
奈良朝の理想的な書體である。
奈良時代の感情的な書體である。



足利時代は白兔の書體である。

大徳安を待たせやうと思ふ。

少なきは、初め形は充分なるが、枝分
充分なる形は、且つ、
に、
天心の論は、
狩野尚行は、探道の才であるが、元七才の書體は、
心服して、天下の名人と稱せられたる、探道のつ人
等、尚行の執事、来るは、皆、尚行の筆致に
倣ふは、探道の外から、
見て、不左、
と云ふ、

皇公の概山式、
の、
の、

瓜海、其一、奈危がちる母一の句碑がある。傳
百年の経母一と実在の人として熱海史に
考証を著しくよめがあるかと思ふ。多分と同一
く井原西路の世に助を彼後の寺泊に散財
せしめその、こんも或の世に他と実在の人として
寺泊花柳界の恩人年表に編入するかも知ん
い。
吾人の隨筆と讀んば活字病の三字を得た。活
字病の四種つてあるよめが世の中は洋山あるが活
字病の三字の類くしい。自分をもい成人と一生
此病に罹つてあつとも云へ得る。若し英一條の紀文
に小判と金幣する回と書いせやればと替くうが

藤原

誰か自分活字と句碑する回を替くよめが
友らに自分また友の之れを交けるひあつらう。
秘佛とよめあがあうらこさうあふ、勿体つけし之ん
をえと目が潰れんら、麻と削くと雷電が鳴り天地が
震動するらとよめ人と思怖せしめら、●迷信を扶
着するん地しえんと目七潰れず雷が鳴らす。唯此地の
葉や御殿の葉、研易する外、多くの場合何んの書
るべきことか多い。或る場合、一切前庭をぬけて
石んが何もうらうたりする。本音が失いしや、燃焚
けつして、無いも云いんず、秘佛と唱へて胡麻代す
もあう、男女相擁す、聖天流、歡喜長佛、と秘佛
とよめ七見えらうのてある。

南都の古仲後の内、不空羅索と名づけたものあり、
何人のことか解しあぬ、最初「製佛の杖料」と
いふことかと思つたこととあるが、この「羅索」
必らず空一からずの意を寓し、人の人を救
ふに綱と素を以て決て救済を空とせ
ぬと云ふことかといふ。

長谷川如是閑のペン子一山の典故、佛杖の
詩にあらんとするが、
如是生涯如是閑、奕衣破杭也閑、
飢寒渴飲只知識、世上是死信不干。
如是也、長谷川の北村を知らぬといふのけし。ペン子
ムルが、後より人から北村あると云ふ、典故といふ

藤原

と自白してある。

一 外田の政治家は、退職後金を作つてゐる。勿論
首相級の政治家は、彼等の退職後自家の
行應を出版するに足るか直ぐ、幾十萬部を賣
らる。ルーヴルエルトの口イド、シマシロも此の
通り、口イド、シマシロは退職後米圓の幾多
シマシロ、ケート、ス等のものを、けしは月二圓か一
圓の材料が四千弗ルと云ふ、必らず漢者が珍重
するから、大の料金が拂ひ出さるゝ日本、
ハシロと近敵するといふことが、
一 日本の早い以り、泉源流派を以て守るが、流派を以て
陰名と云ふ、略略を取つたといふ、強勅といふ所

人命の産便ち事

一 秋の人と云くは誰んも名ぞすのり西行芭蕉良
寛き心也鴨立の海は上の西行や奥の細道と
歩む芭蕉や五合庵と桐橋の良寛の寂寥を
極むるもか實ハ又心はまよひ外明るること
淋し味を感してゐるよと今時どこの秋の人
かあるかとうくは存心石の山一く其人のあり而戦
百敗今い幾人とドン庵に留つて塔のすけに北
大元師の権力を並べんとするところかこんハソ
聯の跋扈を抑くんとする所行き強つてこの方便
の道なきは彼人の心中こそ秋風の寒冷な地
ぬよのがあつて

一 原田徳三郎から尤大五原田二郎徳三巻と云ふ也
ふんれ原田といふ人の郵券と云ふ思ふに即徳三郎
であつたがあの人の偉い澤い全く一即徳三郎であ
る世の寸まの池合蓄秋家古あるが原田の蓄の
秋の徹庵一とあるは彼人の詩の池の香歌と相あ
ちくわのちいといふと蓄あつたか二十二十萬圓の
金を残して死んぬと彼人の此の資金を利息を積
まけりて云々、徳三郎の事業に注いで、回家に大
るる資金を四給せんことを志し其後今も其ま
積まんと云ふ起つて時と刻々金も殖くて行く免
る先金か幾千萬圓を超くともわりの比のから
百年を経過して莫大の資金と云ふ入相違ふ

このころ印林とていふ神話がある。其の故は、
特徴も亦支那民族性。とよ。現はるゝものと云ひ得
よう。物品もよく。他の産物も或は同じ。英回が
あるやあ。

一 自合振生を放棄して御木本の真珠産の前を
くること。此家の息子がラスキン道長が破産
したことを思ひ浮べ。す。居らるゝ。あかして
喜しいことを一向知らるゝ。真逆。百業の任の
樂である。真珠産の放棄をする。と思ひま。息
子だけの放棄はあらうか。ラスキンの原が一枚を
何千回何万回買つたと云へば。夫人を。お
つてもあらうが。西洋の。あらう。禮のことひる。

御木本

日本もそう。北校をエレクトリーがあつて。破
と自分か思つてゐる。殊々自分も。同者のエレクトリー
と同感がある。御木本の道長は息子と反感
を持ち得る。前者が買のた。出ひ百業の任
失ふ大草族のあつた中。ラスキン。取味の身
代をこ。い。一。概。悪。あ。ま。あ。ま。御木本
の身代の中。い。あ。く。得。た。ま。真珠のい。く。も。獲
る。が。ラ。ス。キ。ン。も。容。も。得。る。ま。

一 伊太利か。使。所。か。米。比。の。伊。太。利。因。縁。の。経。り。の。ま
が。現。は。る。が。洋。行。の。洋。行。店。伊。太。利。野。の。こ。も。も
の。り。の。ま。揚。げ。え。た。こ。オ。う。は。伊。太。利。の。曲。馬
園。の。一。人。ひ。い。と。り。の。ま。留。ま。つ。て。洋。行。店。を。登



イタリア軒の創始者

ミオラ氏の物語

師尾氏から使節團に傳ふ

【東京電話】半世紀の昔新潟港に突いた日伊親善。明治年間新潟に在りて「イタリア軒」の創始者故ビートル・ミオラ氏の物語は師尾氏に傳へられたが、僕はこの物語に非常に感服、廿一日新潟縣立郷土博物館にてリベッタ伯とミオラ氏に會つて話を聞くなり、更に物語りの詳細調査を師尾氏に依頼した。師尾氏は早速詳細を調べ更に資料を集めミオラ氏に關する愛考の點と同氏が四十年間愛しつゝ生活した新潟の土地を偲ぶべき、郷土博物館におけき、郷土人形等を廿一日バウルツ侯リベッタ伯に贈呈、そのかみの日伊親善を再び新たに蘇らすことになつた。

あつた日本の心をあつた。...

み伊太利軒と云ふは、自今
の形は、記ある時代は、
洋食の味いなるも、ミオラと
も親のかつた。自今が初め
交つた伊太利人の地、
あつた。...

使節團メツセーチ

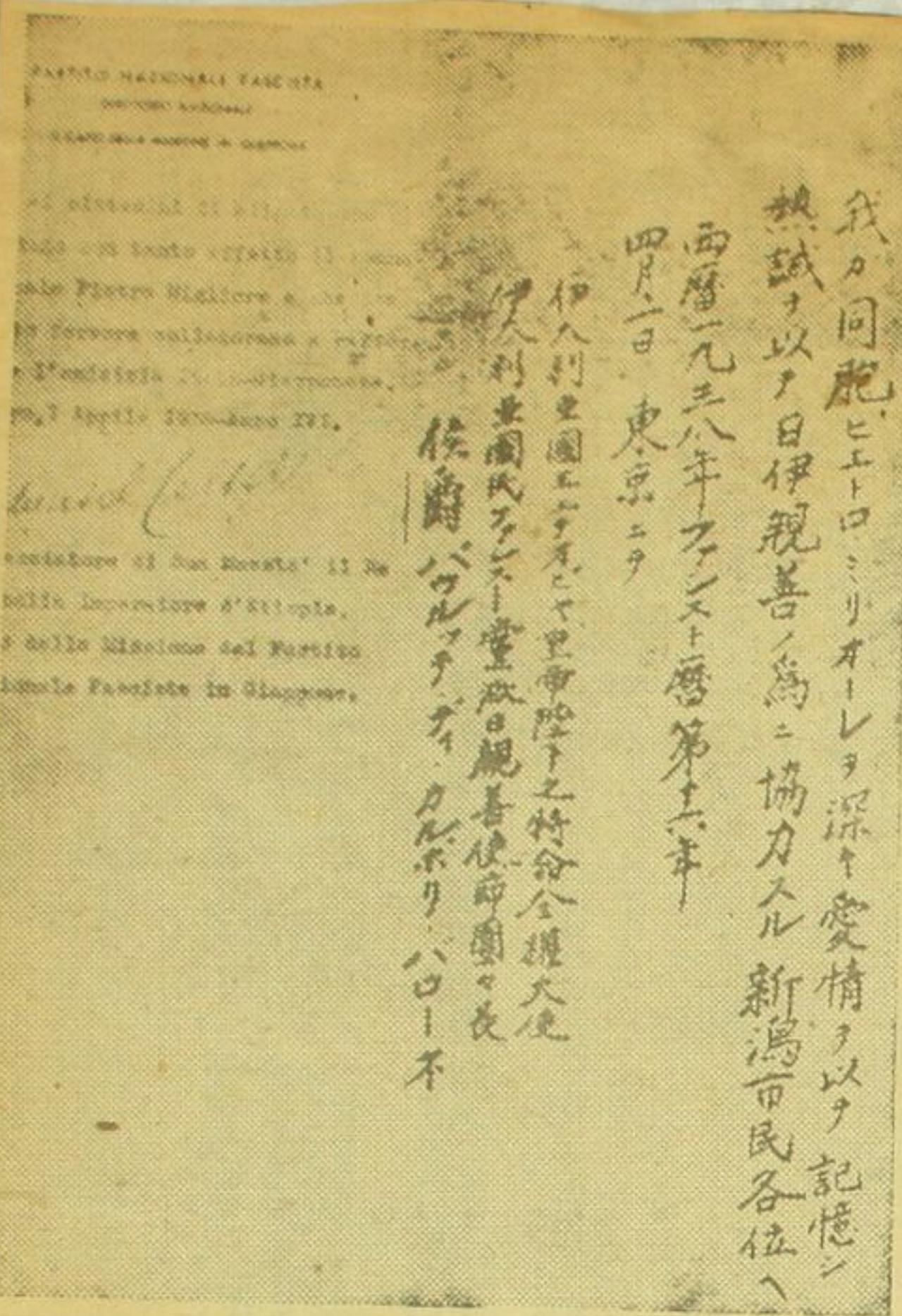
新潟市からも謝電

ビートル・ミオラ氏に關しバウルツ侯に謝電を發した「寫眞は使節團長のメツセーチ」
新潟市長メツセーチ並びにサイ
ン入り寫眞を送つたとの報に接し
市では使節一行が西下出發前に
間に合ふやう二日午前十一時村松
市長名を以て左の如く丸の内帝國
ホテル外務省事務官小川一等書記

官氣付にてバウルツ侯宛謝電を發した「寫眞は使節團長のメツセーチ」
多年本市に在任し我等のよき友たりし貴國人ビートル・ミオラ氏を想起し日伊親善のためサイン入り寫眞及びメツセーチを贈きたるは十六萬市民並びに二百萬國民一同の感激を堪えず厚く感謝の意を表す尙今後の御旅行が楽しく有益に完了されむことを遙かに祈る、新潟市長村松武美、イタリー親善使節バウルツ侯閣下

...

我が同胞ビートル・ミオラ氏に愛情を以て記憶し
熱誠を以て日伊親善を為す協力スル新潟市民各位へ
西曆一九三八年三月二十日 東京ニテ
四月二日



...

杉田勝の重徳川三代将中家元の弟保利
肥後守の娘であつたから、将中家とは血縁つきで
あつた。

四万石旗本
足利家 吉良上野介義央
妻富子(綱勝妹)
長男綱憲(上杉家ノ養子トナル)
二男(死)
三女
養子左兵衛義周
三十五萬石大名
上杉謙信 上杉播磨守綱勝 綱憲
妻(保科肥後守娘) 妻(鶴姫) 妻(紀州大納言娘)
十五萬石 長男民部大輔吉
二男左兵衛義周 (吉良家の養子) となる

・伊太利使の節、同友邦・洗腹の歓迎、梨合を満喫し
漸く京都を去つた。彼等、種々の場合、力に能く限りの
渡料を陳べ、恐らく彼等、日本を渡すこと、トリス
クを持つて、今、さういふことを心算に、既に、あつた。彼等
は尋常親光の旅客であつた。其日本を友邦としての價

償を知らず、若くは未だ、あつた。彼等、自國を去る
船中、今、日本を去る、あつた。日本、一世紀、是、
母島、船の、入つた、おとす、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
か、今、あ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
巻を、あ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
雅と、あ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
を、あ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
の、あ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
ハ政府と、あ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
す、が、あ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
く、使、あ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
人、あ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、

（者中）
 ムリエーの復命を待たせし折々の電報
 清原の事
 少一見
 宣信
 伊太利使
 四月
 陸軍省
 陸軍省の赤誠
 三千萬圓突破
 陸軍省感激の調査

以替り

歌舞團の勝敗を好機に高田陸軍

銃後の赤誠

三千萬圓突破

陸軍省感激の調査

（東京電話）支那軍變以來陸軍に寄せられた國民銃後の赤誠は物質的にも精神的にも絶大なものであるが三月末日陸軍省の調査によると七月七日から八ヶ月余り日敵にして二百六十七日迄に送られた献金額は遂に三千九萬八千八百八十三圓二十七錢に達し慰問袋は百六十七萬七千四百一十個の多数に上つてゐる内
 恤兵金 八、五〇、七〇、四錢
 國防献金 二〇、七六、五、二二
 學術技藝奨励金 七、三〇、〇、三、七
 之を一日平均にすると献金は毎日十一萬六千四百七十五圓余りである

慰問袋は六千二百四十五個といふ、この意味國民赤誠の結晶は何ものよりも力強い支度力となつて脚く皇軍の戦功を招來されたわけである。この外銀紙、各種兵器、自動車、オートバイ等献納額多岐あり陸軍省は感激三十一日夕左の通り當局談を發表した
 △陸軍當局談
 國民各位より寄せられた献金の今日までの費途の概を申しますと恤兵金としては各師團に配當して第一線へ送つたり或は罹病者の爲に送つた額は凡そ百五十萬圓、戦死弔慰金として凡そ三十五萬圓、酒家の慰恤として凡そ百方圓を支出し又國防献金中最高額として戦車、装甲車等の各種兵器、醫藥器械等に對し凡そ一千九百萬圓を支出してゐる

朝日が飛行機補助の計を弄す、及んば
 とぞ人々の陸軍の計を弄す、及んば
 やうな思ふ、此の如き者の大軍を弄す、及んば

九日
 此の如く海軍の
 中
 の
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

の儀や、田の中や、野路をゆく、羅子の如く生へるよも、
ぬり休度か、他定うよ、喜んてし、貴人の目も、入る、
往々踏みぬぢらんと、残刻の運命を辿るよもあるが、
都門の人よ、喜んてし、田舎の農家の名、海に、
貴人、如くか、喜んてし、甘んじてみる、
花の目、可憐に、あるが、
洗靴の百華、
七種の遺愛の滋味、
云々、
二ふよと云ふも不可、

一、戦地、
まゝ、

あ、
ら上陸、
かとも、
い、
分、
暖、
と、
経、

兵士が馬と、
兵ハ馬、
馬の、
馬の、

運動を可しと當向七日慰問代とれ、誠地、送つ
こゝろ。コンナにも母一般、世に忠誠と世に
一端とるゝであらう。

(四月三日記)

出征の妻子に對し、骨肉誰んか涙をこぼし、列して女
性をや、私が行くのよと後、●死中に、此の哀あり
消息と決るゝと酒井淡也の(本派本乳寺布
教の)の諒漢中、左の一節があつて、一讀、
と林の代め、いゝものがある。

一今、次南京陥落の日が二百五十年、
維新の爲め、怨敵の支那、打入り、此日、
又、保國の爲め

感動

私の縣に梓葉といふ町があります。此の町の愛國婦人會、

國防婦人會のお世話をしてゐられる河合様(河合陸軍大將の
お姉様)是久様(御主人は部隊長として北支に出征、御子息
は航空兵大尉にて中支・南支の爆撃に従事し、昨年十二月七
日南京爆撃の花と散り、其の陥落の人柱となられた)の御話
に、同町の或るお宅に、此度の事變に動員令が下り、召集令
狀が届けられました。爾來、お母さんは、時々兩顔に涙を浮
めて、掌を合せてゐられる。愈、門出の日になりました。見
送り、お祝ひ、お歡び、中々盛んでありましたが、お母さん
は、相變らず一言の言葉もなく、たゞ掌を合せて涙ぐんでゐ
るられる。今將に出征せんとせるその息子、勇士は

「お母さん、私の今日の門出に何を考へ込んでゐなされま
すのか、私心が後に引かれます。何か一言申して下さ
い、私はお母さんに心残りがないです」
「さうか、あまりにも勿體ないので、言葉には出さない」と

お天子様にお返し致します。」と

思つてゐたのであるが、今日の門出に、母の心ひかれて
後に心残りがあるとあつては相濟まぬ、母の心の中を申
させて頂きませう。今日まで貴方を私の子と思ふてゐた
のでしたが、勿體なくも、お天子様のお子様であつた。
私はお預りして育てさせて頂いてゐたのだ、今日は愈々
言ひも終へず大聲上げて泣き伏された。これを聞いた勇士
も男泣きに泣かれました。私達、共處に居合せたもの共貫ひ
泣きいたしました。と承りまして、私も胸打たれたことであ
ります。皇軍勇士の母には悉く斯うした血が流れてゐるので
ありませう。茲に日本精神の尊い底力があるのであります。
軍人將兵の生命や身體が皆、上御一人の御生命であり、御
身體であると同じ様に、日本の國土・國民の生命も身體も財
産も悉く、大君様よりのお預りものでありませう。故に、
一旦事ある時には舉國公に捧げまつる、喜び勇んで、全部を
お返し申上げる。茲に眞の滅私奉公・盡忠報國の原底があり
ます。これが眞實日本の姿であります。

ツクぬつかり

雪嶺のコンナナと云ふをみるが彼が多くの切手とコレ
クトしてゐることに既二巻の如きが更なる頃のちいのを
所帯してゐることを誇り歎に云ふのが一層其の
てゐる。

一 世界の公認を得て居る賭博園も十の二は夫を其の
區も七十四の四陰連を加入して許さんまの圓に
心近年佛國の金係と云ふ。こんな愈々佛も其の
七日放蕩者流の天國と云ふに佛都の世界の法
賣所は美人とレヤパンが名物で、賤も其の金を
纏めて一夜蕩者一得の銀金富と云ふに、賭博所
が加ひて見ると、丸れ蕩者の天國と云ふ人も備はつ

世界公認

たと云ふのいふところ。こゝが佛金の事か不幸か佛人の
云く、其考は世界の如く、傷者の金と云ふは、地
物と云ふは、靴の甲、皮、供てんしと云ふ。

一 田中智子、大宮天氏(百傳)の宛感、来つて日中、天
氏、百年に今を聞くと少き故に、どんと血縁の毒
くあることを得るようだが、知るは、おれいよるゆゑ始め
て毒曲を知り得た。天氏の一女に、百二と云ふ、あま
門人の小川春を嫁し、其女、智子、嫁す、智子の
天氏の孫娘の夫也、天氏を祀るに、小川春を
七合祀する所、此は、春を、橋を、又、春、源の
醫家も、天氏に、歌し、詩を、終る、血縁を、後
よ、春を、橋を、又、春、源の、人、智子と、云

余の爲りの特（予珍本に作り）作り中箱本を例の朱摺本也。湘南の
詩集の上校を乞ふ（漢文）。披見すんハ墨の着花
の律の可う左に抄す

吹面江風酒半消。越絲初散夜寒多。鐘聲了
隔水金龍寺。欽影橫欄玉枕橋。微月半窗
花正露。畫船變換客吹簫。行人只愛春
宵好。不覺長堤去路遙。

湘南詩鈔に述遊錦亭。花六と飲み就んて花六
と路の詩あり。或るは湘南の地作とあることハ、遊
遊錦ハ墨の百花園と稱し入金のこと多。湘
南の心を思ひ、遊遊錦と命す。刻亭一亭とんて
時に世を連んこと多。錦原分と云ふ所以也。湘南

此處を述いりハ、五十年前余の爲り、鶴屋石の歌を
作り、余も亦其詩の深遠の印を踏りたり。其夜
と記憶す。其の今稿ハ中の植半也。此今五十年前
主僧ニ四推し、余が返礼のとも志取ニ河内、僧
今ハ五六日後の事と云ふ。而して湘南
未のべき約あり。終に未と云。天然痘に感染しん
平（抄）報を得たり。二日後に左らんが
此詩植半、今しは後教日問の作と云ふ可
す。余の絶作と云ふ所也。余ハ湘南の地命名の
傳いしと云ふり、いつかや入金に游びし時、養
鶴屋石、命題、亭名を考へ、主僧ハ其の今
詩鈔を讀んて、其若く存すを乞ひ、予の思ふを

八天の詩ハ左の如し

王孫墓畔雨初晴、落尽梅花草欲生、雪北香南
千里路、鷺鳥春一夜、一書卷、今以錦字回文乾、
似借方格托真踪、前度離魂情、非初年、知
君何全抵瓊瑤

此詩必去冬の如し、余能く了能く、花六七里、送
：任し、湖南弼後一ヶ月許を隔て、同底の如
く、追憶潜れたること得ぬ

一 湘南の集中、河口五峯と左の如く、伝多し、余左の如
くを愛す

鷓鴣夢梅亭上送五峯、悵無江
多麗久遠、思見要、國中主客、總堪描、酒地

芭蕉暈翠、秋愛竹枝聲、最憶墨畫
梅之詩、北里、治春、裙履、閑東、倚、初君、悵
檀且須、後、未日、公、梅、紅、欲、潮

一 長尾秋大、南摩、羽峰、を、送、つ、詩、數、首、を、送、り、
ふ、不、愛、も、惜、り、来、り、し、ま、あ、り、秋、の、七、十、八、日、本、の
時、を、も、王、考、秋、の、夜、歎、を、も、各、詩、秋、の、骨、經、の
地、を、詠、す、羽、峯、も、又、旅、行、飯、味、を、も、あ、あ、去
壽、と、鼓、の、詩、を、も

帆、橘、五、頭、こ、夕、陽、低、海、柳、色、と、望、水、迷、煙、
浦、風、の、又、多、古、怨、吟、行、到、北、自、懷、
十里、潮、波、一、片、舟、岸、香、塵、去、氣、煖、合、愁、小、
倉、城、の、多、岐、路、不、向、北、州、即、元、物、

海西烟の接江南霜入小春黄入柑、迂路大村
城下玄、文人は有片良三、

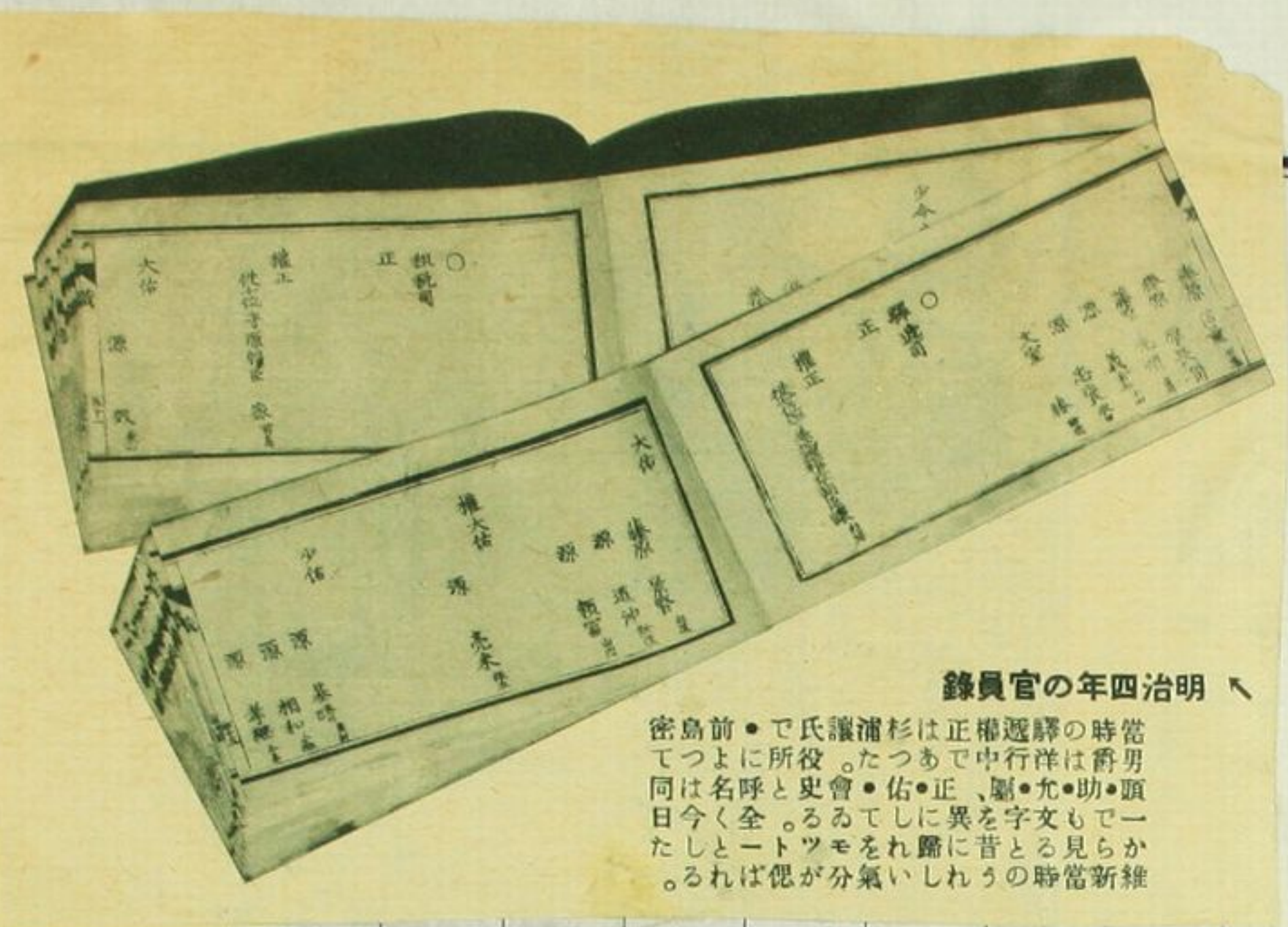
舟車載酒半量珠、自是伝歌一勝區、官
府不漲堅自守、法蕩人士復安奴、
人之口其心相交、物々情随利並弛、列四
終無風可視、大夫多失改攸基、

蒼龍跨枝躍何之、太白舟舟聖名時、
天草島南青標渺、雲逸山嶽北碧山欽哉、
知君南欲見琉球、行到扶桑地盡頭、貝錦
蟻珠多勝古、海門山下莫淹留、

丙寅十月日送 羽客 南摩子
七十八百玉芳秋 未定之昔

南摩子

一 通信の伝書日、通信者の新報、通信の整備不
特輯部も是行ふべき、前島男を中心する通
信の地帯とも囑さん、日本のローランドといふ島
国と魁一郵便の創定の苦心を考へ送つたが、
昨の書、余の技術を収め、新報の振利した。
通信の伝書の就し初めといつた、本月の二
十日が十七日伝書日であった、郵便創定が成
るべく、通信の整備は、郵政の第一回東海行
も走り出され、伝書の日、三月一日、伝書を
大湯層に引き、立すと四月廿日、高田の伝書、
此の伝書が昭和九年、到る、定められた、
何れかといふと、前年の昭和八年、四月、



録員官の年四治明

密島前・で氏讓浦杉は正權選驛の時當
てつよに所役。たつあで中行洋は爵男
同は名呼と。史會・佑・正・副・允・助・頭
日今と全。るあてしに異を字文もで一
たしと一トツモをれ歸に昔とる見らか
るれば偲が分氣いしれうの時當新維

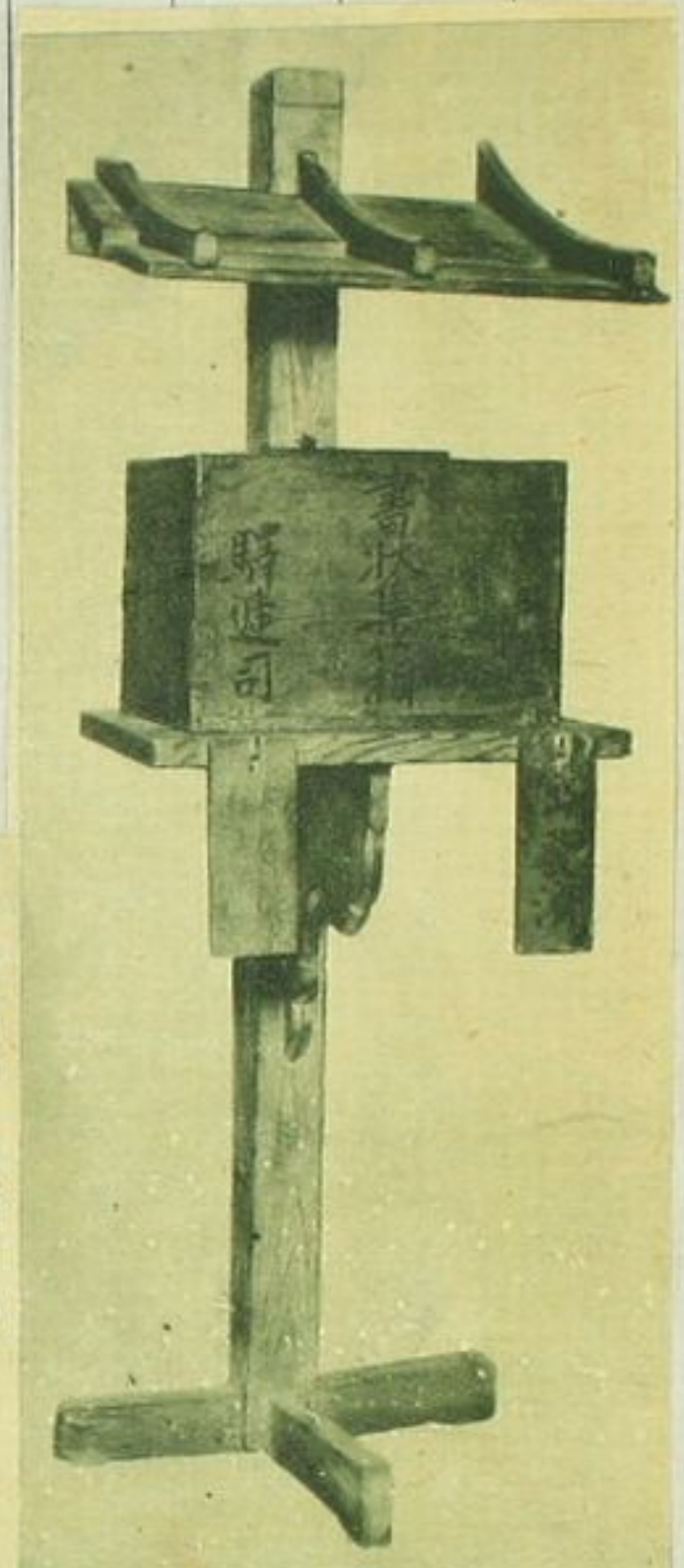
→ 驛遞司と四日市郵便役所
(明治五・六年頃)
中央の冠木門が驛遞司(逓信省の前身)
の正門、左方が四日市郵便役所の窓口
で、丁度現在の日本橋郵便局の所在地
にあつたもの。此處で前島驛遞所の所
の職員が目白押しに机を並べて頭飛つ
たものである。



→ 東京大森附近の電信架設工事 (明治五年)

(年三正大) 話通話電線無の初最界世 ↓

の所驗試氣電省信逓らか頃年十四治明
みてれさ究研で手の氏三村北・山樺・瀧島
正大れさ成完が。機信電線無式KYT、た
線無衆公で間島神・羽島の縣重三に年三
初最界世はれこ。たれさ始開が務業話通
べす筆特に買一の、本日この學科、でのもの
。たつあで功成き



→ 書狀集函 (明治三年)

明治四年の郵便開始に先立つて東京・
大阪・東海道などに設けられたもの。
今のポストの前身だが形は江戸時代の
目安箱によく似てゐる。



↑ 創業當時の郵便配達 (明治四年)

明治四年三月新式郵便
が始まると東京・大阪
から官營の飛脚が毎日
一回出て東海道を走
り、東京大阪間三十九
時(今の七十八時間)
もかゝつたが、それで
も當時は記録破りの速
さとして反つて不安が
られたと云ふ。

布々んれ通行事業特別令分計法が、念に九年から
実施せよれを模して紀念日としれ。實に一般令計
の長い間通任の任をてんれが一一般令計の重座下
りり通行事業七往々行法まもやうな窮境をま
つれが特別令分計とさうれの通行事業に取つて
大考さ。とさうれかたれく九年に紀念日を
定めれれ。

経理部から拂ひ出す金額の時二百萬圓と雖も
小切手の発行は千枚 （千枚） 発行、経理部長の
印を捺す事務科員の手がハシあがり、是れ
得ばくす御免と蒙らるゝものが出たり、又印が紙の
● 輪を杜撰置さん此堅牢のよむあふるゝんが
多様のたふし曲かつて用をさるゝぬこととるゝ止
らるゝ更々紙印を新製せしむるゝ、経理部
の混雑七一と過るゝんこととるゝぬ、あつても毎百圓
圓の買物とする、豪太者振りの盛えらるゝぬが物
の鑑別や任滿を存具慮す、苦心の用買客も
よむゝん

一 大隈侯の長子が久松房に他の娘と結婚するの

証があるを、實否を知らせんと、侯の女の結婚を
欲しし多きが侯の夫人の初めから気が進まず、不
同意であるゆゑいつかあ人の間を既ニ交わす
流るゝとさうて来れと侍く、夫人も進を軟化と
久しく刑務署に在つて、~~判~~公判、来れ新選
に到らるゝ久原が若し無罪ならうれば、結婚も
よむゝんとすむ、進人が来れと、久原が有家とせん
ば、官の府の制親とせん侯爵家の結婚を許可
するのことに別り切つてゐる、侯夫人が同意を
流るゝも無理ならぬことがある、此の結婚の例の森
信の献策が侯がこんと同意せぬ奥意、此の侯
爵の侯家の財政難を満んとしてゝ、在るゝん云

あとのちあふ。

一 桂湖村(土十郎) 京都の親族を訪ふとて下車と共に
肥後(肥後)に赴いた。此人の師は河津の名門桂氏の家
に生れ、長く早大の漢文の教授を執つたから、自
分も多年交つた。此人の荒うし時、同姓の赤馬
(大正天皇の侍醫)より召喚され、余と主席
を争ふた。赤馬(赤馬)の家は在りて日又後、
親(赤馬)赤馬の勤勉と云の類に敬服して、去
ば(赤馬)余の漢文の終、余の徳故深し
早大に授け、任令を教授して、其の号、深き
名を傳へた。勉(赤馬)他、余が病をうけ、疾を力
めて登校した。此人の著述は早大出版部から出版

一 漢籍の四字解の由、
余の著述の評と傳とある。此人よりある不似合
の高文(高文)の著述と云ふ。檢(高文)作した。檢(高文)
いことと云ふ。陶器や書畫と好んぶ。志(高文)は
其の趣味の著述と云ふ。何ん(高文)は、
買つて置く。志(高文)の著述と云ふ。此人の病も云ふ
べき。志(高文)の著述と云ふ。志(高文)の著述と云ふ。
やの(高文)の著述と云ふ。志(高文)の著述と云ふ。
志(高文)の著述と云ふ。志(高文)の著述と云ふ。
前記の事と云ふ。志(高文)の著述と云ふ。
一 松平頼壽伯と紅雲伯に飲み酒次、
松平頼壽伯と紅雲伯に飲み酒次、
松平頼壽伯と紅雲伯に飲み酒次、
松平頼壽伯と紅雲伯に飲み酒次、



東風吟神



東風吟神

東風吟神

一 此所の難波引平文三帖の刻印を得たと余
 邦方とむとあり余即ち書と想ふ、文勢の印
 多く、履也、この二帖、其真履家、之出
 難、且、其印影を、こゝに収めおく
 一 牧野静高(福成)の遺著、作新傳疑史、迄
 子其、因り出、一日、過、後、出、真、を、免
 ぶ、え、作、行、迄、著、こ、余、嘗、て、後、を、行、を、
 と、替、へ、る、日、豪、傑、七、の、か、た、の、一、欄、を、得、け
 作、行、志、士、の、送、り、を、免、れ、し、漢、書、の、唱、宋
 臣、傳、に、な、る、こ、と、あ、り、静、高、の、此、方、に、免、れ、
 こ、の、ま、た、静、高、の、作、新、史、の、研、究、の、つ、と、の、史、法
 今、に、列、し、て、注、家、の、漢、法、に、材、料、を、得、る、こ、と、少

漢書

今、も、静、高、の、今、も、も、も、も、一、二、の、作、行
 送、法、を、得、こ、ん、静、高、の、史、法、の、集、大、成、を、免、れ、
 静、高、の、對、座、し、て、免、れ、を、得、る、こ、と、思、ひ、ま、す、卷、末
 に、漢、文、の、野、史、略、議、と、作、行、雜、錄、を、収、め、皆
 共、に、後、に、記、す

四月十二日記



木製鈴飾



木製鈴飾

を頼るに於て大膽な其の語に應じて各郡の
巡回して一時の都合を臨み法文の講釋をやつ
たが内容もよくそのまゝのこととあつた。昔年の
評議會を以て聽者の青年輩が多いたる際
予も無責任の言を吐けるが此の自治制の
評議會の聴き手は聞ても判らぬ大施の
衝に當る故に所村の支配家を以て多か
つた。此等の面々の平生の評議會を以て判らぬ
を中におあるが自治制は唯此の評議會
直接の銘々の立場と關係があつたので何れか
七五の父老が出席して真面目に聽講し
んと對して自分も評議會的に淺慮であつた。

明治三十二年

法文の能將の敢て困難なるが實地のことを胸
に描くことと云ふ多しの徳と法文の將を以て
から、勿論脚靴擦痒の的のよむ、吾もさうも心か平
かひさうなるが何れか合つて私の將を心身と聽く
べくんば、何れか一旦私の講義を聽くは面々自
分の長の關係を以て、こととらるるが、
流ひも東京へも或る人を招いて私と對して、
此人の説く所を私と見ても難く、
本當のこととてあつた。私の自治制五十年
のみに此の懺悔をやつた、志か一杯のことと
ルことを信ふと、自分も此れも、
明治三十二年の功ありと云ふ。

因に記す日本の市制町村制の獨逸のモツセの原案
 2基の比に比し最而部落法と云ふに尚月を
 ハ巻尾に収りて東京朝日の切標に就て看よ
 一 明治の初年より東京の銭湯、江戸時代の慣習が
 其後残るゝて今も去ることおかし味と感ずること
 がある。女湯とお世評湯おみり湯の張札がある
 にも、後の世を考へれば何んのことか弁し難
 かりしものもいふらん。女湯の女の交際の場をも
 ちかへく、互いにくさ湯とくんがやうことが行は
 れ。んかお世評湯がある。んかさふん、女の入浴
 時、長い湯と使つた。んか男湯、比すんが
 幾分、ぬる、尚又上交際の、お世評湯を使

ぬから湯屋の迷惑、と云ふまじさう、斯うせ
 り札のある所以は、長くして又こころを禁
 一得し

一 牧野野舟の進は、終末迄、西郷と左宗棠
 の通信あり、一談殊と感興をもてん
 或る人、清の左宗棠と清の鴉片の支那を宣
 するの甚しきを以て清も鴉片の鉅額を嘆惜
 す、宗棠笑つて曰く、誠貴兄の如し、然るも余
 と云ふ人、人の貴國の損耗、更に更に甚
 し、或る怪んことを聞か、曰く、日本の西郷隆盛を
 殺す、其損失、敵國鴉片の毒を奪ふ、其
 大なり、西郷我が同族の親、在るを奪ふ、其

をきとて曰く我四山將に征韓の奉めんを然ん
と我敵の朝敵あるありき、鄂羅斯狼子
の心満蒙を垂延すこと久し、滿蒙より征人の
軍中に師兵あきし据り軍事を伴便し、建瓶の
庭止をわく、北京城をくたをまわす、野懸
を得んや、然るも今や幸に彼は四方より多
未だ東略を逞くすま、昭あき、長歎、馬塔
及いず、我、日本の士族、国家の干城、腹心
なる者數る年、さうも、今や時勢、變、奉、
用、帰、秋、疾、貴、靉、濼、敵に長大息し、復、
斯、非、平、を用、の、韓、國、の、平、の、朝、念、の、
部

羅斯又くも、韓、を、構、め、こ、と、あ、ん、我、國
り、兵、才、一、戦、銳、鋒、の、向、所、彼、の、積、年、の、心、を
挫、折、し、以、て、昔、國、の、安、全、を、固、く、唇、齒、輔、車
百年の天計を付つ、山、主、亦、大、快、と、さ、す、や、
軍、
久、ん、之、と、誦、や、も、予、大、に、之、を、壯、し、極、力、婦、
の、蘇、約、と、さ、す、借、い、い、か、く、日、本、彼、を、忘、る、所
ま、
軍、
法、然、進、思、堪、く、こ、も、り、い、か、り、し、

西御征韓の深長魯西を撃つ、左宗
棠を聴く、孫、を、静、海、の、北、に、も、何、ん、極、か、
か、北、江、も、信、し、難、し、と、告、も、西、御、が、士、族、を、馳、駆、り
外、戦、を、思、い、ま、す、乃、り、豊、公、が、西、朝、を、成、す、の、後、餘、威

を朝鮮に及ぼし、逆の心を撃つ人として、も似たり、西
郷の四葉の後日行ん、陽物を割き得た、正露の
洲起、今十尚は依然として存す、一に、露日と戦つ
て懲りた、或る二に、三に懲りた、魯あらん、西郷
守持の長國に壯るも、當時に在つて目的を達する
こと、恐ろしく不可能な、一、唯、彼、城、山、
命を破すの代り、魯國の死、魯國の心、英雄の
君に全かりし、一、之んを破る、城、山、左宗棠と
同、

一 樹木の枯死に際して、あるものを生かさんとす、
若木を其傍に併植する、必らず効あり、一、土、
堅、予、七、ち、あ、こ、と、か、か、其、理、久、く、分、ら、る、こ、う、に、

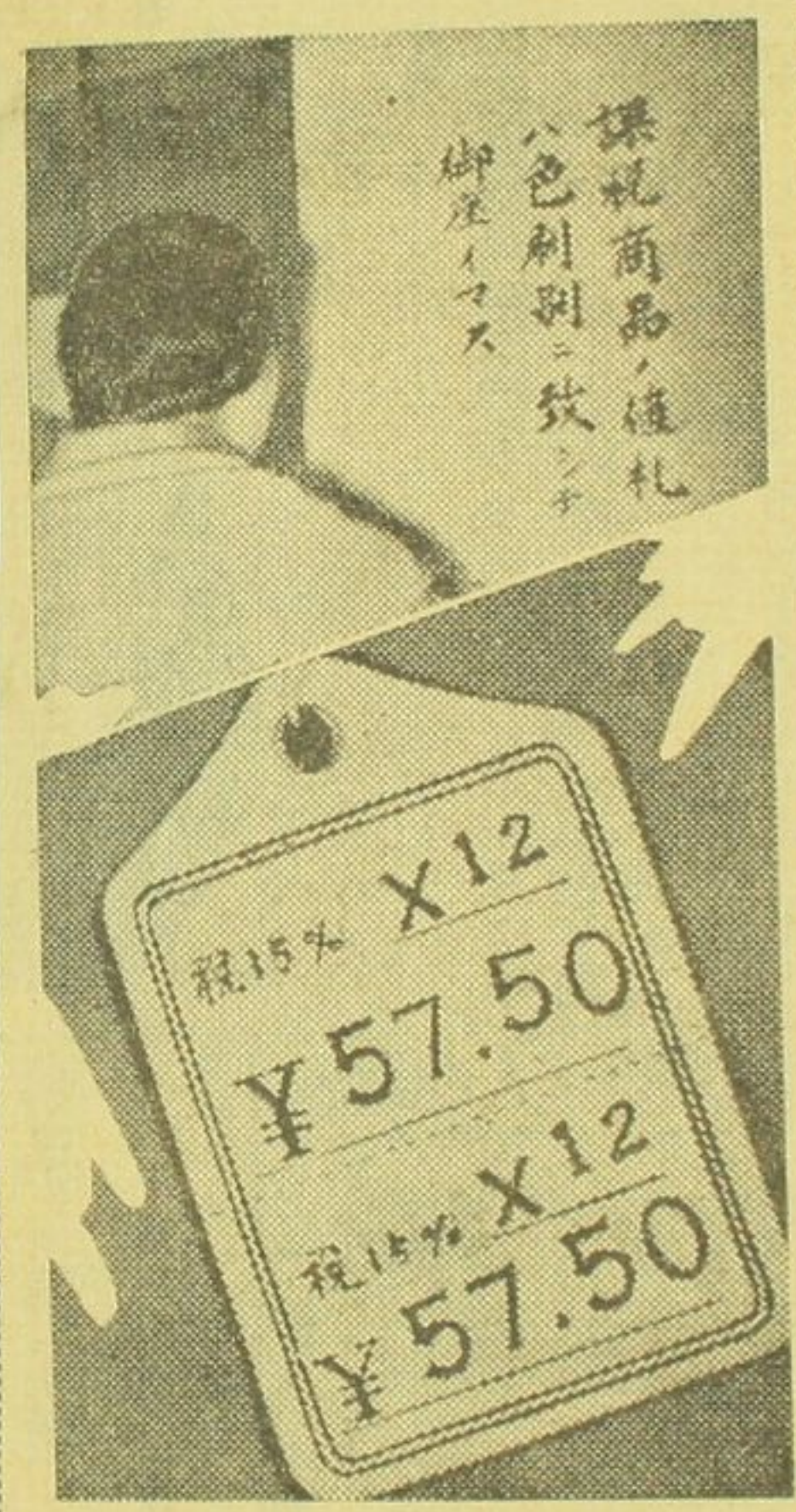
而して、今、い、れ、る、モ、ン、の、若、木、に、説、き、
の、ホ、ル、モ、ン、の、作、用、に、依、り、育、成、せ、ら、る、や、ら、ん、植、物、
に、予、植、物、ホ、ル、モ、ン、の、作、用、に、育、成、せ、ら、る、の、れ、と、云
ふ、ホ、ル、モ、ン、説、の、出、る、こ、う、に、前、に、予、を、早、く、老、男
子、が、若、か、い、女、子、と、臨、近、し、る、が、若、及、く、と、云、ふ、長
壽、の、一、法、と、説、き、ら、る、或、の、女、子、教、育、に、其、の、教
師、の、老、へ、ず、と、説、く、も、あ、ら、う、な、ら、ぬ、も、老、人、の、こ、が
好、ま、る、も、奇、し、き、最、年、老、の、よ、め、を、妻、と、し、る、例、が、い
く、つ、ち、あ、ら、う、外、人、が、特、に、若、い、女、と、絶、交、や、り、
に、用、い、る、こ、と、も、皆、若、及、り、説、き、本、の、こ、と、も、い、へ、き、
歟、

一 惟新の、
古家や、

おれいこむ屋の四とよのかあつた。芭蕉の古池や
 の句とそじつ夕川柳の詞字をささるるの状を後
 つてあの。大政維新とさういふ。注の海のと海部七がうめき
 とさう。元海も限りの土地の放棄もせん。何人うま

正札に税率

各デパートが
色分けて實施



大蔵省では既報の如く物品税を正札にその税額を併記するやうに各百貨店に指示した。今後は税率十五パーセント

のものは赤色十パーセントのも
のは青色といつた様に色別けし
てこの色は各百貨店に自由表
又は裏面に夫々の税率を明記
その旨を店内に掲示してお客様に
知らせることになった
且これ等の正札は何れも二枚
置きとしてお客様に賣つた時そ
の半分の一枚を店に保存して
後でこれをまとめて所轄の税
務署に申告する様に話が決ま
り準備成り次第夫々百貨店が
實施する
唯このため百貨店としては正札
のつけ廻りにもう一度忙しい目
をしなければならずお客様さまの
買い振りを一寸心配してある
「當局は某百貨店の掲示と新し
く作る正札」

藤岡製

備席を作つてさういふ無償の座つてさういふ布令が出
 り位で、主派を穿たれ住み込みのさういふ。朝廷のいこ
 れと切込入進つて、住み込みのさういふ。折る花
 首のさういふ。代りさういふ。今あるのとさういふ
 隔世の感がある。

一昨今の軍國下は、格と文藝、音、報、國の二字
 が用ひらるゝ、不埒の代り、ステイブル、アイバー
 の衣服を用ひらるゝ、愛國者とあつて、其の布を
 音、國布と稱せん、何んかデパートも愛國
 の或許の税を拂はねばならぬ、高品質の正札を
 知り、校の如く税か記してある、即ち、愛國人の
 此の納税者、納税者の愛國者である、購買者、報、國

ところが、横山の只の石川筋の境界の大土持は、幾十
 億の分地と関係がある。この中橋も對抗する
 市況と関係を生ずる必要上、あるべき商売の
 ぶちを嫌み、其物を定めて、その生産を
 賃借し、位を仕来、双方共多くの費用を費し
 中橋側もよく戦った。大隈侯が急げ、
 まさしく俄然形勢が一変し、投資の甚多をゆ
 け、と横山、津敷、人多数の投票を得、
 又此の選挙戦の選挙史に稀に見る大戦であつ
 た。横山の政治界に入り、遂に没落し、
 理由に由るが、近年の横山も不始の境遇と
 後、此の二つの事柄の事柄であつた。

横山

一 直のいろいろの新法が生れる

或るマカロニー衛生雑紙に
 畢、丸紙と云ふ漢があつた。

昔の「腎液」といふ腎液を

と云ふのが、字の腎と精液

と他の変じ、いろいろ腎液

と云ふ、此のウツと云ふ。

此のステール、ファイバー

の漢があるが、マカロニー

ファイバーと云ふ漢がある

のて、ぬいとか、毛のアイバー、
 湿か味をつけ、
 の、巾を伊西のマカロニーの如く、
 かわする、
 毛の行

「マカロニー・ファイバー」

晒木綿の買ひだめまでして、
 ステール・ファイバーは、もともと人相
 とよく似た化学製品だけに、ス・フ製品は
 保温力が少なく、シャツにすると寒いとい
 ふ批難があつた。そのうちに出たのがマ
 カロニー・ファイバーで、真中に穴のあ
 いたス・フ糸である。羊毛、棉花が温かいの
 は繊維が中空であるからで、これを真似し
 てス・フの中に空気の泡を送り、空洞をつ
 くれた。但し、人工であるから穴が真中に
 明かすに少し片寄つたり、竹のやうに節が
 できてゐるが、どうやら穴が明いた。これ
 を顕微鏡で拡大すると、イタリヤのマカロ
 ニーのやうに見えるので、この名ができた。
 いはゞ、ス・フの特殊新製品であつて、ど
 んどん工業化されてゐる。

つと入門を許さんとは不揮法か出てみるがど
こころを禪味を感ずる後である。その百書百
中七目的物を心合ふ速くとも如何の微物か
全く眼中に入るとも自ら発射前に自家の
挿管より動さるいかにして後へ六の外なる
相違まい。この射術はよくある。柱の森を
も大切なる法である。一寸角汗の根付れ幾
十人ぬえ十の念の強さを削刻する。その
其の根付を十倍大に拡大して眼の映る終
録からその出来まい。刀を鍛錬する。刀
を死物と思へず生靈あること。心得るけん
は、業物とする。まを同じ道地である。

一 昔の古僧知識の白刃を忍んぶの勇と氣を現
して人を心服した例がいくともある。人誰んか死を懼
んてうまかまう。怯懦の心は誰ん由である。唯れ
若僧の幾の怯懦の心を駈除するから、其の残さ
る。心の物に懼れぬ。死は誰んか自若なる。あか
ある。之を考す法は、禪心である。心を降下丹田に置
け。心の澄みぬ。かく恒然なる。よめである。此修禪
の法は、鎌倉時代の武士に珍重された。此修禪
宗が元の大兵を、滅滅した。名は、修禪の勇氣
から生じた。時宗祖元禪師の自白は、人生の困り
よめい怯懦である。時宗の怯懦は持主である。心
に七の此の怯懦を駈除するを得ん、強ゆる。

時宗が信濃の将主たるは時宗を駆逐して自ら自我
あるが故に信濃を生ず、自我を去るは天地自然と
して人心ある時宗も亦も信濃に安んずる人とな
るす唯此の縁一切の雜念を去らざるは、礼兵士
の戰場に於ける勇士も自我を忘るるは生かす後
等、死する時、又も天宮降下の高麗を叫ぶ後
著る事案の南島の廣地傳を所以に戰場に臨
人の来世の事とするは、（此の條は） 向導の念を
去るが故に、（戰場に） 身を投じて、（此の條は） 海に身を
一 菅原公傳を二三の漢文に、（此の條は） 人の自我を去るは、友人
前田河原一らの著る如く、（此の條は） 解剖的の菅原公の
性行を叙するは、（此の條は） 蘇峰の自傳の此の條に於て

漢文を著るは、（此の條は） 蘇峰の自傳に於て、（此の條は） 人の自我を去るは、友人
いくつうの交り、（此の條は） 菅原公の全集に於て、（此の條は） 人の自我を去るは、友人
奥の蘇峰の為人と好まざるは、（此の條は） 人の自我を去るは、友人
ストとして尤も長く名彰つと云ひ、（此の條は） 此の條に於て、（此の條は） 人の自我を去るは、友人
宜しき事あるは、（此の條は） 人の自我を去るは、友人
よも不純のよもあるは、（此の條は） 人の自我を去るは、友人
ハオの事あるは、（此の條は） 人の自我を去るは、友人
の間に往々疎隔を生じ、（此の條は） 人の自我を去るは、友人
の所を賤賤し、（此の條は） 人の自我を去るは、友人
かまへ巧く、（此の條は） 人の自我を去るは、友人
蓋たの懐海を懐くは、（此の條は） 人の自我を去るは、友人
吾等と夫倫を懐くは、（此の條は） 人の自我を去るは、友人

此傍よりいふと既す、かいつの目的であつた。此
傍の若者ハ随分ワキ入で蘇峰の内幕をさら
け出してゐるが、甚だ興味がある。随分久松の
多ハ蘇峰の文壇の時のいてゐるからとて、誰か
彼人を想上に載せると、思い切つた公家の評論を
すゝもいふ、そんなる、此蓋然性ハ若者
ハ而蘇峰の趣意してゐる、やゝ多けん、蓋
然の正体と現いすことも出来ぬ、譯心が、此傍
ハ直筆、此傍も近未出のよと思はる。

・自治制を布五十年祝典を奉け、此際隣国
法を想ふ折柄のよハ其傍に、流家を題と
して流家の逸事と集められたる、此と見

を讀む感、一と云ふが、自分ハ、昨夜寝たふの
き、此乳を就いて考へて見れば、あまのいさく
と思ひ出ることあり、やゝとあるけり、と
先の思ひ出する、蘇峰の蘇生祖傳と稱する任
人、ことび、今も其角の長が、野史を、もうとある、
人い、人々、心持、口を考へれば、互ハ相降、と、
士、あつた、か、蘇峰の、中、か、く、く、く、く、
向に、蘇峰、や、蘇峰の、秋、生、物、右、と、ある、が、
此の、か、ける、一、れ、あ、か、一、寸、糸、一、重、あ、る、が、
多分、アン、テ、法、法
の、蘇、峰、の、家、の、物、作、る、の、花、が、咲、いた、と、その、風、が、能
さ、る、の、い、ふ、と、あ、る、。回、答、と、い、は、す、精、神、と、も、云、ふ、が、
外、例、の、性、と、い、ふ、と、ある、。山、谷、冬、一、と、目、下、新、東

う校うともある。曰一又も業者が競争のほえ終ん
陶家に移り、木家まひとこれ例いにくともある
が銀世の針の本舖みすやの漢り、同名の針屋
が出来たことを思ひ起す、此ころの匠名に伊摺舟
と布衣を履か、相満りと有北のテハートを作つた
が布衣を履、終に伊摺舟に茶を吞さん
河筋より駿馬を起す陣家、右も左もへきだが夫
婦喧嘩の辛う取こし、支こへる陶家がいやと
よんだ、こゝろより自分か、の印刷分紙を託せし
てゐる時、深夜半、輪轉機と動して近頃の
睡枕もさうして、始終昔情をやへた。毎日、そ
干の煎餅料をやつたりして、うさかつた、社倉

まひ、つ満堂、男女の客かあり、襖紙、ん其
動静を切らさし、不快のこゝろに
自分、いつかや修禊寺、漫ふと浴して時、夜會
か寺に滿つて自分の長を、寺の鐘柝、をせし、
く相夕梵鐘の音を聴いた、此こそさるが、不快
をせし、禮むらう、今、定、満り、神、
実行教の社殿かあり、相夕社鼓を交き、又相夕
の所を聴く、心が澄ん、い、氣持、か、
奈須の湯用邸、附、此、に、多く、別荘か、出来、て、
か、其、別荘、此、こ、も、近、克、是、社、と、呼、ん、だ、あ、り、
成、
栄、す、
家、と、構、ひ、て、あ、り、
自、己、の、名、を、撰

へとまのから、講究を命じらる。

先角法師の大切に、遠方より、親族や朋友より、又隣り距離の考より、頼み入るゝぬ。唯、法師の、大なる、病を、こゝに、濟し、公の、徳がある。孔子七耶、蘇七、病人、といつくり、めと、教へて、みるが、文法、に、た、ころ、よく、あつ、く、く、多、く、病を、病人、を、中、の、こ、い、よ、の、さ、い、の、い、の、邦、人、の、惡、徳、い、ある。

・ 國、出、漢、邦、に、就、て、い、列、に、給、す、こ、こ、に、さ、る、(四月、念、日)
・ 自、分、の、家、に、ま、い、り、か、ら、厄、の、神、の、舞、い、こ、ん、じ、に、送、る、
や、者、渡、ぬ、が、輪、渡、し、も、困、つ、こ、る、さ、ま、月、中、改、印、が、
中、身、と、病、ん、じ、困、つ、こ、る、と、丹、生、の、保、め、ん、
熱、ら、か、ま、く、一、通、を、後、い、て、一、時、の、日、七、え、く、ま、い、や

う、ま、い、ま、い、の、漸、や、急、入、る、と、持、病、吟、血、を、抱、
み、今、も、中、身、と、病、の、全、治、に、列、に、さ、る、い、ま、ん、と、揚、
こ、か、く、と、内、子、が、事、縁、を、お、外、と、極、(五)の、骨、
を、折、こ、身、動、を、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
よ、い、か、今、も、苦、す、と、呻、か、し、と、い、ふ、日、印、の、あ、い、
依、婦、の、あ、い、か、く、病、ん、じ、に、三、日、候、し、苦、す、中、の、在、
に、仕、末、自、今、の、幸、い、に、列、奉、す、い、か、遠、く、さ、さ、さ、
拂、せ、せ、ぬ、ら、う、い、ぬ、形、の、折、物、既、感、の、真、心、
桂、次、の、胃、症、の、重、患、に、推、り、命、死、許、
七、ま、い、と、四、散、を、受、く、真、心、の、余、の、病、七、
山、の、既、感、い、ぬ、の、ん、南、あ、ま、き、こ、い、ま、い、の、桂、
次、の、い、余、く、こ、二、山、年、表、く、本、年、の、七、十、七、と、云、

のよし場所であつた。

延喜式に示す諸國配流路程に依れば、伊豆安房常陸隱岐土佐佐渡の六國を遠流の地としてあるが、其中佐渡は去京一千三百二十五里で一番遠いことになつてゐる。尙信濃伊豫國が中流で越前安藝國等が近流の地である。

佐渡へ遠流の刑に處せられた人々の罪名を種別すれば、大体次の如くなると思ふ。

- | | | |
|----------|--------|-------|
| 上代 | 政治的犯罪者 | 高位高官 |
| 中代 | 軍事的違反者 | 武士、大將 |
| 近代(徳川時代) | 司法上犯罪者 | 浪人無宿 |
-
- | | | | |
|--|-------------|---------|--------|
| 佐渡へ流罪となつて、配所の月を眺めた人々の中、主なる者を舉げて、佐渡と京師との交通の狀を明らかにしよう。 | | | |
| 養老六年正月 | 正五位上穗積朝臣 | 貞觀八年九月 | 伴清繩 |
| 天平十四年十月 | 川邊朝臣 | 元慶四年十月 | 安信吉國 |
| 天平寶字元年 | 安宿王及妻子 | 安和二年四月 | 僧蓮茂 |
| 延曆四年十一月 | 能登守三國真人廣見 | 長保元年十二月 | 藤原宗忠 |
| 同十一年三月 | 正六位上安曇宿彌繼成 | 寛弘二年 | 長峰忠義 |
| 承和六年三月 | 伴宿彌有仁、刀岐直雄貞 | 長元四年八月 | 藤原相通 |
| 同十年十二月 | 文室内宮人忠基 | 同五年九月 | 出雲守橘俊孝 |
| 嘉祥元年 | 從五位下讚岐朝臣 | 永承二年 | 清原宗武 |

(高志路(丹波) 東三つく)

あつて、佐渡がまんと迎へることも天采とせぬらう

凡人七飲も多かへれば、寺が大人物の墳墓を有する
 故を以つて青の史蹟とするからう、佐渡を大
 らう史蹟と有する所の他に多く無いと云ふことは
 出来ぬ。流瀆して後、教養も乏しく、
 心も多し、怒と吞ん、
 探討し、
 相剋史の佐渡を、
 であくも、
 漢令に、
 あるが、
 を受けるか、

康平七年九月	下野守源賴資	安元二年三月	上西門院藏人平盛方
承保二年四月	散位源基宗	治承元年三月	近江入道蓮淨
康和二年九月	中務丞賴治	同三年五月	左衛門尉源思清
同五年八月	神祇權大僧大中臣輔弘	正治元年三月	僧文覺
嘉承二年七月	散位賴貞	承久三年七月	順德天皇
元仁二年二月	義綱	文永八年九月	日蓮上人
天永二年	下野市源明國	永仁元年四月	平宗綱
保延三年二月	平房盛	同六年三月	藤原爲兼卿
康治二年七月	源賴盛	正中二年	藤原資朝卿

新羅が百濟を滅して三韓を統一せる頃其北方に國を立てたものがある。これを渤海といふ。渤海國は聖武天皇の神龜四年高仁義等二十四人を使者として來朝させたが、海上風波の爲に途を失ひ、蝦夷の境に到着した。然るに蝦夷の爲に、高仁義等十六人殺され、高齋德等八人僅に身を以て出羽に通れた。朝廷使を遣して是を京都に迎へ、大極殿に於て天皇渤海使の朝賀を受け給へりといふ。

これ渤海の我が國に通ずる始めである。

聖武天皇天平十三年三月

友を語る

藝妓街の事務所

亡友山田真南の追憶
市島春城

自分の青年時代の同窓は、追々
疎遠して今は残り少なくなった。
友の内で語るものは少くないが
毎度追憶の端になるのは山田真南
と山田愛川である。

彼等は吾等と共に、小野村の編
譯會に列し、改進黨創立の難局に
參じ、早大の前身東京專門學校の
興るや、共に創業の經營を輔けた。
吾等の行徑は時に異同もあつたが
交りは終始親密であつた。

山田真南は通稱「助」といひ、
大阪の商家の子で、早く漢學翻譯
兩出に學び、漢學の造詣あり、詩
書に長じ、漢華の人としては格別
に氣節が高かつた。彼は法科を修
めたが、成業の後弁護士となり、
傍ら早稲田の法科を教へた。彼に
は奇抜の行爲が多かつたが、弁護
士事務所を特に藝妓街の裏路
出雲町に設けた如きはその一例で
ある。その頃出雲町の家は皆煉
瓦構造で、遊藝場比、藝妓の居
であつた。彼はその中の一軒を買
借して弁護士事務所を設けた。
だから頗る人目を惹いた。當時彼
は無妻で、書生も置かず、唯一老
婆が炊事をやつてゐた。自分はそ
の頃東京警署の着服部第一の
九春社に毎日出勤して某新聞に執
筆してゐたが、九春社と山田の事

務配は一丁を隔る近距離にあつ
た。九春社の編輯部が余りに窮乏
であつたので、山田の事務所を執
筆の處として毎日通つた。
當時の山田の生活は、簡單なも
ので、家具というても、彼が師
として仰いだ、名法官玉乃世洞書
の「鶯花月」の額面を有するのみ
で、他に何も無かつた。不思議に
豪華な一領の衣類を所持してゐ
た。彼は登樓する時に限りこれ

を著した。自分も時々借用したこ
とがあるが、兩人相携へて遊ぶこ
との出来なかつたのは、美服が一
着しかなかつた故であつた。彼は
ある時遊里より喜色瀧面で歸つて
來ていふには、昨夜初めて好意婦
を得た。彼女相當の文學あり、漢詩
をよくす。余別に臨み一詩を祝詞
に留めた。次回行かは必ず唱和の
詩があらうと。この頃の芳原には
事實斯る女性があつた。

ある朝の如く山田を訪へば、
山田曰く、昨夜一椿事あり、今朝
九時を過ぎるも未だ朝食を喫しな
いと、その故を問へば、昨夜炊婦
に要はれた。自分は怒つて即夜放
逐した。ゆゑに今朝食を喫いてゐ

る。これから豊多川に到り、一杯
を傾げんと、豊多川は屋後の學素
店で物干場ひに到ることが出来る
乃ち二階の階敷に上りこみ手を拍
つて樓下を呼ぶと、樓下は驚いて
いふには「下足のないお客さんに
呼ばれるのはこれが初めてであり
ます」と、相共に笑つて杯を擧げ
たが、酒次山田の詩があつたけれ
ども今は忘れた。ただ忘れ難い
はこの時の逸興であつた。
真南は初任司法省の補少書記官
を拜した。これは當時において異
數とされた。彼は晩年東京市か
ら擧げられて、衆議院議員となつ
た。彼は性傲岸で、苟くも人に屈
しない男であつたが、選挙には遂
に節を屈して、戸別訪問をやつた。
このことが如何にツラかつたか、
彼はあの屈辱は生涯忘れられない
と時々いふた。

真南の遺稿

山田真南

友を語る

新聞束を金庫に

亡友山田愛川を憶ふ
市島春城

山田愛川は通稱「助」といひ、愛
川または通稱と號した。廣島縣出
身で、同期同窓の一秀才であつた
が、體弱不遇であつたのは惜しむ
べきである。彼は大學で文科を
修めた。漢學の素養は余り無かつ
たが、時文を書くのが頗る達者で
たらとこの長文を作り、曾て登
録するものがなかつた。彼もし探
報者をもつて任じ、記者生活を分
としたらば、文章も一段進歩した
に相違なく、記者として一頭地を
抜いたであらうに、彼が政治家

たらんと志したが、身を誤る本
であつたやうに思はれる。彼は政
治家たるには余りに細密で、小心
で且別介であつた。彼は別介の
ゆゑに常に孤立して斗米のため田
舎新聞にまで筆を執つた。或は地
方より選ばれて衆議院に出ると試
みた。本氣で戦はなかつたため
か僅に廿六票を得たのみで、爾
來三十六票外史と自稱したことも
ある。彼は如何にも筆達者で諸都
鄙五、六種に寄稿するを日課とし
た。大森木堂は彼を稱して天下の

記者といひ、三宅雪嶺は、彼の文
藝に於て天才の出来損ひといふ
て惜しんだ。
愛川は真南と親交があつて、真
南が卒業近くに病んで卒業論文が
書けないのを氣の毒に思つて代筆
したのである。聖門遊ひの論
文をどう書いたか、別に苦もなく
迅速に書き終つたので諸君は皆一
驚を喫した。
彼は長い習慣で朝と晝との食を
離して、晩食に多く飲み多く食ふ
を例とした。
彼は廣島出身だけに朝山陽に
私淑して洒落を氣取つたが内實
は小心、自家の經濟に意を用ひ
た。彼は止宿した旅舎などは、
特に最下級のものを好み、物置
同様の暗室を起臥の處とした。
彼は一領の衣服の外何物をも有
せず、たゞ諸方より贈々來る新
聞紙は室の一隅に束の堆をなし
てゐたが、これが彼の全財産であ
つた。自分はある時、君といへど
も新聞の原稿料ぐらゐはまさか紙
屑ともしないであらうが、どこに
置くと問うたら、彼は笑つて堆な
す新聞の山を指さして、これが俺

の金庫だといふて新聞の中から若
技の紙幣を取出して見せたので一
笑した。
私と愛川との間にをかしな種話
がある。大學の寄宿舎にあつた頃
兩人相携へて商品に遊んだが、仕
拂に臨んで全部の勘定をなし得な
かつた。愛川のいふのに、君はこ
こに待つてをれ、自分は金策をや
つてくるからといふて立去つた。
自分はその意に任したが、いつも
自分が仕拂役であるから愛川に金
策が出来ようとは思はず、別し
て晝中休暇で友人の不在の折にか
ら、自分は内心危ういながら、半日
ばかり經つと彼は元氣よく立戻つ
て、ズン／＼拂ひをやり、サアこ
れから新聞で一戦やらうといふの
で、自分は不審を抱き、途上彼の
金策手段を聞いて見ると、彼は大
膽に眞屋を訪つて、荷車二個を衆
校の寄宿舎に引き寄せ、寄宿舎
の寢台に置き棄て、ある影具幾十
人前を眞屋に送つた。眞屋では五
十圓位貸すといふたが、後日引出
す時のことを思つて、わざと渡ら
して借りたが、また新聞で飲位位
十分あるよといふたので自分は彼
の策略に服したことがある。

七 田中氏
八 羽川氏
九 村山氏

同郡川井村附近
同郡数神村附近

西頸城郡甘園田保(早川谷)
同郡沼田保(沼川庄)等

中頸城郡和泉郷
西頸城郡根知谷

一〇 福智氏
一一 仁科氏

西頸城郡根知谷
北頸城郡姫川上流溪谷

一二 小本氏

三島郡大津村附近
北蒲原郡奥上田庄(作木村)

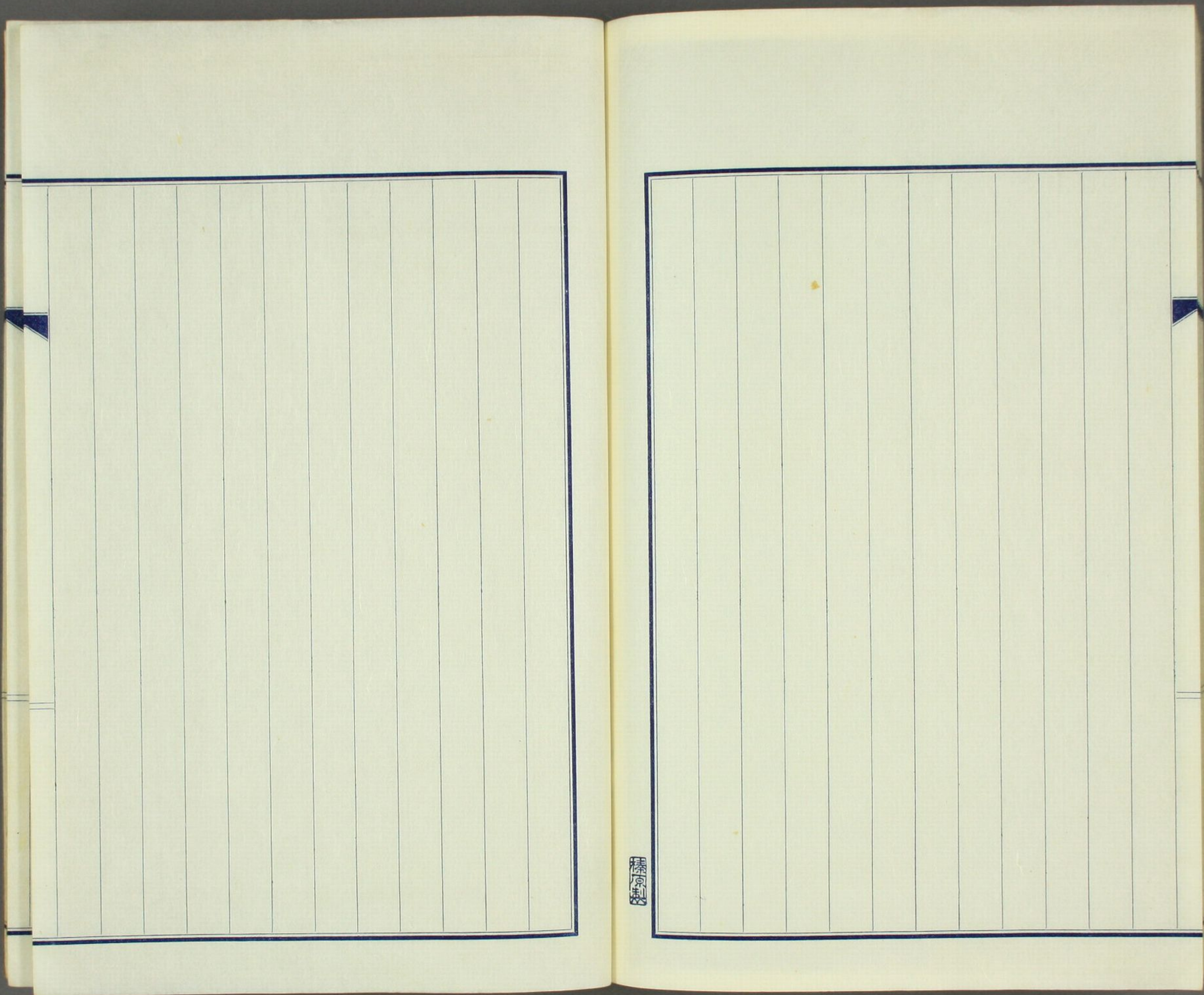
一三 佐木氏
一四 南保氏

北蒲原郡奥山庄(平素川)
北蒲原郡奥山庄(平素川)

一五 大島氏

古志郡大島庄(長岡附近)





東京製

式典次第 夜部

開場
開會
式典

午後五時半
同六時

常行三昧 音樂大法會
大導師 淺草寺住職 大森亮順師

副導師 奧州 中尊寺住職
副導師 奧州 毛越寺住職

講
休
演

憩

開會之辭
判官最良

司會者
帝大講師、文學博士

小林一郎
島津久基

築前 理琶 舟辨慶
詩吟

旭 豐田 靜芭
岩淵 神風

延年舞

- (一) 花折
- (二) 勅使舞
- (三) 呼立
- (四) 祝詞
- (五) 老女

源義經公七百五十年祭典趣意書

源九郎判官義經公は文治五年四月を以て奥州衣川に戦歿せられたのでありますが、本年四月三十日は正しく其の第七百五十回の忌辰に當ります。平生公を景慕して居る所の吾等同志は江湖諸君子の御賛同を得て、此の日を記念するために盛大なる祭典を舉行したいと存じます。

凡そ吾が國に於ける古今の武人中に於て、公ほど一般に崇敬せられて居る人はありません。公は幼年にして父を失ひ艱難辛苦の中に長じ、兄頼朝を輔けて源家の復興に力を盡され、六年に亘る努力が報わられて平家は滅亡し、源氏の世となつたのであります。而も其の功は兄の爲に認められず、一日も身を安んずることを得ずして奥州の果てに戦歿せられた。公の一生は眞に献身的努力の典型とも稱すべきものであります。又公が勇猛果敢にして常に其の機會を捉ふることを誤らず、華々しき勝利を収められたことは、永く武人の軌範として仰がるゝ所であります。非常時の現今に於て公の爲に七百五十年祭典を舉行し、相共に公の生涯を回顧することは、民心の作興と愛國の熱情の鼓舞とに貢献する所多大なるものであると確信いたします。

就ては四月三十日(土)日比谷公會堂に於て左の次第に依りて祭典執行を致しますから、萬障御繰合せ御責臨給り度此段御案内申上ます 敬白

昭和十三年四月

源義經公奉讚會

電話王子參八參貳番

發起人代表 (順序不同)

陸軍大將	男爵	荒木貞夫
海軍中將	淺草寺	川島令次郎
海軍中將	佐藤鐵太郎	飯田久恆
海軍中將	奧平俊藏	佐藤清勝
陸軍中將	松井茂	正木直彦
陸軍中將	川合玉堂	芝田徹心
前帝國美術院長	井上哲次郎	井岡豊二郎
帝國技藝員	小龜	小泉
東京美術學校長	中央義士會理事長	源義經公奉讚會實行委員長

式典次第 晝部

四月三十日 (土曜日) 晝夜二回

式典 零時 參集場 零時半 開會 零時 式典 午後一時 散華諸天讚 音樂大法會 大導師 大僧正 大森亮順師

副導師 平泉 中尊寺住職 副導師 平泉 毛越寺住職

司會者 小林一郎 文學博士 島津久基 旭 豊田静芭

一、開會之辭

一、文學に再生したる義經

休憩

詩吟 延年舞

(一)田樂 (二)王母ヶ昔 (三)式三番 (四)留鳥 (五)唐拍子

式典次第 夜部

開會場 午後五時半 開典 同六時 常行三昧 音樂大法會 大導師 淺草寺住職 大森亮順師

副導師 奥州 中尊寺住職 副導師 奥州 毛越寺住職

司會者 小林一郎 文學博士 島津久基 旭 豊田静芭

開會之辭

判官最員 帝大講師、文學博士

延年舞 (一)花折 (二)勅使舞 (三)呼立 (四)祝詞 (五)老女

二教授への追悼

桂教授の事

渡邊秀方



桂教授

此時代であつたらうか。
 ▼三十五歳の時早大講師となりその該博深なる大頭腦は漸く詩文を離脱し支那學の根幹たる經史の攻究に轉移して來た。時に往々其博學が果をなし俗人に容れなかつたが、命世の著ともいふべき漢籍解題の出づるに及んでその名の空しからざる事を認識されるに至つた。時に年三十八であつた。その後漢籍解題の出版と前後して歷代漢詩評纂を早大出版部より出し續いて同部が漢籍國字解の一大要書を發行するや國語、荀子、論語、禮記、十八史略、史記本紀、八書等計十三冊の講義を編出し自ら同部書の中心著作となつてゐた事は世人の知る所である。然し此等は決して先生の編著を傾け磨いたものでなく、漢學力の衰退したる今日、考證的な著書を出しても讀

者少く從て出版者もなく特また支那學と云ふ分科のない大學の學生經營の注疏など會て香ふて見た事もない様な相手に對して到底其の學識を發揮する機會なく、一言以て蓋へば其晩年は多病と不遇の中に没したものと云つてよい。
 ▼以上は既出のものを略説したのだが先生の著述の重要なものは遺稿として家藏されてゐる。先生は趣味性の發達した人であつたから遺著編輯は非常に多く其二は國語に於て現代の第一人者で其作品も多數に上るが、嘗て漢詩等の博士館に招聘せられたのも偶然でないと首肯せられる。夫故に最も活潑なものは國語の遺稿である。遺稿の第二は少壯時代より未發表の漢詩漢文類が非常に多く就中興味あるのは章炳麟、張有爲、梁啟超等との筆談録で談論風發、文章雄渾各人の氣風躍如としてまた得難き文字である。何れ此等も出版されるものと憶ふ。

高谷教授

花園兼定

◆第二高等學院から高谷實太郎君の逝去の通知が運達して來た。それを見て私は實にびつくりした。それを見て運達して來たことが全く當然であり、誰れしもその死が急であり、葬式が直ちにに行はれることを知つて、人生の無常を感じないでは居られなかつた。成績判定會議に私の席の隣りに伊藤康安教授が居り、その隣りに高谷君が坐つて居た。あとで私は遺稿を取りながらいろいろと話した。それは氏の逝去の何日前であつた。「どうも、そういへばこの頃少し元氣がありませんでしたな」と石川教授が私にいつたが、私にもさういふやうに思へた。二年前にはい



暗然たるバチエラー博士

その右はアンドロウズ女史とマジヨリーさん

バチエラー翁に哀し

歸國を迫る生活難

置土産・アイヌ語辭典

アイヌの父ジョン・バチエラー博士が今秋住みなれた日本を後に心ならずも將來の生活費に心を碎いて故國英國へ去らうとしてゐる。博士は明治十年來朝以來六十二年間の長きに亘つて精神的に父財的にもアイヌの面影に糧食を忘れ、昭和十一年北海道で陸軍大演習の期には幾くも行在所で御膳食の光榮に浴し、昨年は又母國英國皇帝から社會事業功勞章の輝くO・B・E文化勲章を授與された程だが収入は北海道郵託としてのほんの僅しかなく然も博士は今秋學生の大事業ではあるが經濟的には頗る恐まれないアイヌ語の和英大辭典の出版に多額の私財を投じなければならずその出版費で殆ど總ての私財を費すことになるので、余儀なく生活のためアイヌに帯きぬ心を産しつゝも實財一人を便りに故國に歸らねばならぬと云ふのだ。

目下博士は北海道より今は亡き夫人の姪アロレンス・アール・アンドロウズ女史を秘書に世田谷區世田谷四ノ六五三元北海道廳内務局長で現在海濱會館勤務の博識吉氏邸に補在中で千數百圓に及ぶ版権の校正を博士を中心に英語の師はアンドロウズ女史、日本語の師は博識氏が援助し博士が老眼に頼つての努力は涙くましい限りである。二十二日夜博識氏邸を訪れると三氏協力で校正中で又けふ

はアンドロウズ氏の姪マジヨリーさんも見え校正の手助けをしてゐたが、博士は校正の筆をしばし休めて置く。
 この頃漸く身體が弱つて一日三時間以上は校正も出来ない状態です、皆様の助力で辭典は見事のものが出来ませうが出版費に相當金がかかるので心配してゐるのです、最近物價が騰貴して生活も中々案ではありませぬ、姪のアンドロウズが一年間の約束で遙々英國から來て呉れて種々面倒を見

て呉れてみますが今秋はこれも歸る豫定で、その時私にも一緒に歸れと盛んに勧めたのです。北海道には立派な教會も學校も出来たかも知れぬだらうと云つて呉れるが私にしては第一、第二の故郷である日本を去るのは全く残念至極です、生活の資力さへあれば日本の土となりたいが、最近のやうに物價が高くては老後が心配です。歸るに當りては立派にもう終つたのだから、あなたの仕事は立派にもう終つたのだから、歸國しませうとやさしくいはつてゐた



自治十五周年を語る

野水 録 郎

貴重なる二資料 [上] 明治廿一年の地方自治制度編纂委員會——寺崎武男氏筆——内相官邸にて右より青木周藏(外務大臣) アルバート・モツセ博士(内閣法律顧問) 山縣有朋(内務大臣) 芳川顯正(内務次官) 野村精一(逓信次官) の諸氏 [下] モツセ博士の「自治部落制」草案

自治制といふのは市制町村制だが、夫の沿革をいふと明治維新の際の五箇條の御誓文から出てくる。地方に關する法規は大久保内務卿の時に出来た。然し之はほんの端緒であつて所謂自治十五周年になるが自治制のもといふのは市制

憲政實施に大礎石 山縣公草創の苦心

”部落法”から市町村

町村制であつてそれに最初の手をのせて自分が委員長になつて初めたのは山縣内務卿だ。山縣がさうしてドイツ人のモツセといふ人が非常に骨を折つてどうしても人に起案させてその大綱を決めた。憲法 實施に當つて地方自治制を布かなければならぬといふことで非常に盡力された。それがために地方制度編纂委員といふものになつたのがつまり今日の

所謂自治制で、それが明治二十一年四月十七日に發布された。ドイツ人のモツセに立案されたのはその時分日本に自治制の芽はあつたが法規としては完成したものがなかつた。あの時分には外國の法律顧問にロエスレルとモツセといふ人があつたが、このモツセといふ人はベルリンに居つて地方制度の研究をした人で、篤學者であつたが、さういふ人が居つたからその人達の意見を徵したところ矢張り山縣公と同じ意見で憲法實施前に自治制を布くがよいと言ふ。それはドイツでもさうであつた。憲法實施の後はどうしても國民の

天氣と氣候 第五卷 第三號 昭和十三年三月號 抜刷

北越雪譜を讀みて〔拾遺〕

理學博士 朝比奈貞一

謹呈 市島先生

町制であつてそれが最初の手を
のを設けて自分が委員長になつて
町制を布かなければならぬといふ
見があつて例へばスタインといふ
學者の如き比先達者であつた、そ
れでドイツでは憲法實施前に自治
制を布いた、之は私が千九百七年
にドイツに行つた時に丁度自治制

憲政實施に大礎石

山縣公草創の苦心

”部落法”から市町村制へ

町制であつてそれが最初の手を
のを設けて自分が委員長になつて
町制を布かなければならぬといふ
見があつて例へばスタインといふ
學者の如き比先達者であつた、そ
れでドイツでは憲法實施前に自治
制を布いた、之は私が千九百七年
にドイツに行つた時に丁度自治制

の人の意見を讀したらそのモツセ
といふ人が山縣公に建議してこれ
は憲法と同様に重大な法律である
から特別の機關を設けてやつたら
官から即ち特別の調査機關を設
けたら官からといふことになつた
た、それが即ち先に述べた地方制
度調査委員なのだ、それを採用
してさうしてモツセといふ人に日
本の習慣や日本の制度等を参考と
して自治
制を起草
するやう
命じた
氏郎木練野水



氏郎木練野水

市町村制要綱といふものを委員
の方で決めて内閣でも夫を認め
て其大綱に基いて起草させた、
それがモツセの草案で内務省に
保存してあつた、ドイツ文で書
いた物だが震災の時に焼けた、
惜しい事をしたと思つてゐる、
今度自治制記念展を松坂屋で開
くがあれは貴重な材料だつた
その自治制も市町村制とは言つ
てゐないで部落法と言つて市も町
村も一つの

- #### 町村日本一競へ
- ◆一番人口の多い村 山梨縣東八代郡木賊村 二二六八
 - ◆一番人口の多い村 兵庫縣武庫郡禮道村 三二、五六七人
 - ◆日本一の勤農村長 (四十五年十月勤農) 岩手縣下閉伊郡金澤村 兼澤福次郎
 - ◆日本一の勤農議員 (五十二年十一月勤農) 群馬縣東郡富岡村々會 議員 横山健吉
 - ◆日本一の世襲村長 岡山縣龍野郡庄内村内田村長

法律 だつた、それをそれ
ではいかぬといふと、その編纂委
員の方で市と町村といふものを分
けて市制と町村制といふものにし
た、それも度々改案をしたりとい
ふ議論があつたりしたが結局
明治二十年の末迄にそれが纏ま
つて元老院の議に附して廿一年の四
月十七日に發布したのである。一
村も一口に言つてしまへば

といふのはどうしても憲政の
基礎だから私は山縣公の遺像を
を掲げたのだ
ところが自治制の方についてはさ
ういふ考へはなかつたのと政府の
算算が少なかつたといふ事で、今
度は憲法は建てられぬといふ事であ
つたが私は何時かは此自治制功
勞者としての山縣公の遺像を建て
なければ其が相済まぬと思つてゐ
る、それで敢くとも其記念日には
山縣公の遺像で報告をしようとい
ふことになつた、まあ山縣公の
功績といふものは譬へていへば自
治制の生みの母だ、山縣公ばかり
ではなく其下の諸自派の力も無
あつたし又地方の人々の犠牲があ
つた事も事實だ、此五十年間を
回顧 して見ると、私は自
治制發布の時には關係してゐない
が、自治制を發布して之を施行す
るについては内務省に居つてす
と關係して居つたから自治制五十
周年に陛下が式場に出幸になる
御慶典といふ事を承つて誠に感
激に堪へない、考へてみると日清
戦争日露戦争又今度の事變に於
ても戦後の復興といふのは矢張り
自治制である、自治制が骨を折つ
てゐるのであるから私は自治制と
いふものは學國一致の源である
と思ふ、さういふ意味に於て自治
制の施行といふとは効力があつた
ものだと思つてゐる



右より青木周藏(外務次官)アルバート・モツセ
自治部審判 草案

工事のダイナマイトの爲であらうと云はれてゐる。若し事實とすればその様な工事を施行する人々の留意を希望する次第である。越後縮については本書にもかなり澤山の頁を費して詳しく記されてゐるが、本場だけに小千谷では「縮史」や縮に関する出版物が澤山出てゐるやうである。雑誌「工藝」昭和六年六月號で淺田壯太郎氏の「越後縮」及び吉田正太郎氏の「越後上布」なる記事を見たが、兩者共に簡単に要領よく記されておつて此の織物に関する概要をつかむのによい。吉田氏の記事は、筆者が前に本誌に引用した(三卷一號)白柳秀湖氏著「自然と労作」中に引用してある。木綿が本邦に常用される前に織布に用ひられた材料は大部分楮又は苧麻であつて、歴史的に見れば相當に古くから用ひられてゐた纖維材料であるが、苧麻織の衰微したのは一は原料植物から織物に仕上る迄の勞力が多かつた爲らしい。越後に於ける縮の恩人、明石浪人堀次郎(本誌三卷一號)を祀つた「縮堂」なる小宇と彼の墓とが今日でも小千谷町極樂寺前にあるといふ(淺田氏の記事による)。

材料にかかる租税を夫々「白そだか」及び「青そだか」と稱へたさうである。前に筆者は苧麻とラミーとカラムシとの異同につきいさゝか疑義を呈出しておいた(本誌三卷一號)が、東京小石川の植物園には之等が栽培されてゐて、ラミー *Bolivia nitida* (ジャワ原産)・カラムシ *Bolivia nitida* (産地不明)の二種があるとのことである(理學博士服部静夫氏による)。此の屬の分類學的研究は以前佐竹義輔氏がやつて居られたが同氏の報告が筆者の手許にないからよく判らない。ただ農業の立場と純植物分類學の立場とではどうも命名方針がちがふらしい。前に筆者は纖維原料植物たる苧麻栽培に對する農業氣象調査の必要を唱へたが、此の問題はその後中央氣象臺の大後美保農學士によつて取り上げられ調査結果が報告された(大日本氣象學會講演會、昭和十二年十二月十日)。

秋山の古風の中に越後高田の邊鳥坂山に城を構へてゐた平惟茂の末孫が秋山人の祖先であるかもしれない(七頁)とある。此の鳥坂は原澤氏によれば「トサカ」と訓むのが正しく、此の名稱を有する土地は、一、高田の近く、二、北蒲原郡、三、南魚沼郡の三箇所にあるさうであり、此の中で三は現在坂戸といふさうである。而して之等の土地の中の何れが史實に該當するかは今日尙ほ議論の餘地ありといはれてゐる。秋山の三倉村で老女が帯布のやうなものを羽織つてゐたとあるが(九頁)、之はシナノキの皮で織つた布のこと、後世轉じて粗麻布を云ふと辭典に出てゐた。鞋を捕るのに搔綱を使ふことが出てゐる(二頁)。原澤氏によると現在は四手綱を使ふのださうで、次の頁に鮭漁箱突圖が出てゐるが、鮭を突くには両手を使ふもので、此の圖の様に片手に夜間、松明をもつてもう一方の手で突くといふ様な眞似は出来る筈がないといふことである。雪中の戲場(八〇頁)の項に圖があつて之に畫者京水が誤つて棕櫚の圖を入れ、初版はそのまま出版され、後年版木の左肩に斷り書を象眼して版にしたことは前に筆者が記したが(本誌三卷一〇號)、今度出た岩波文庫の第三版には斷り書のない初版の圖が入れてある。原澤氏によると鹽澤は往昔天

領であつて、諸事取締が寛大であつた爲、操人形・歌舞伎等が流行り、土地の者もそれにならつて芝居を演じたりなどしたが、上を憚り芝居とはいはず祭禮と稱したといふ。幅の事が所々に出てゐる(三頁、一五〇頁一五五頁等)。その材は朴(四二%)とイタヤ(三九%)が主でミネバリ一二%、胡桃七%、其他一%といふことである。現在の幅は形小となり幅も狭くなり先端を尖らせてないといふ。又、大型のものを特に修羅といふ由が本書の所々に出てゐるが之も現在では殆ど使用されず、現品も舊家にでも行かねば見られないといふ。

其の祭は本書にもある如く左義長と同じである。前回の拙稿に對して醫學博士入澤達吉先生から御懇切な御注意を戴いた。越後の城下(二七頁)に列擧された城下町の中に「頸城郡に今町」といふのがあり、之に對して筆者は前に蒲原郡の誤と記した(本誌三卷一二號)が、之は筆者の誤で、蒲原郡にも今町といふ所があるが之は現在でも戸數五百戸斗りの小さい町で(入澤先生の御出生地とのこと)、本書の城下町の今町は現在の直江津の事であり従つて頸城郡で差支ないわけである。兩方の今町を明治廿年近く迄は前者を下今町、後者を上今町と稱して區別してゐたさうで、現在でも直江津のことをその直ぐ近くの高田の人は今町といふこともあるといふ。芭蕉の奥の細道に今町とあるのは勿論直江津のことである。之については原澤氏からも同様の御注意を頂戴した。なほ「越後地名考」には今町の名も直江津の文字も見られるが、特に海岸寄りの方を直江津と稱したのではあるまいか、極く古い時代には、交通路に當つてはゐたかもしれぬが、特に一つの驛とはなつてゐな

かつた様にも思はれる。天然瓦斯の出る如法寺(七頁、二五頁)は、「如法寺」と書いてミョーホージと讀むのださうで、妙法寺の文字は誤りであり、ニョーホージの讀方も正しくない。入澤先生が念の爲わざ／＼三條へ手紙で問合せを確めて下さつた結果もやはりさうであつた(本誌三卷七號)。魚沼地方が會津と密接な交渉があつたことは前に記したが(本誌三卷一一號三四頁)、入澤先生によると魚沼郡には會津藩領があり、現在の北魚沼郡小出町には會津の代官所が昔あつたといふことである。此の兩地方の交渉は今日の全國道路擴充計畫の中にとり入れられ、小出から會津只見川方面への縣道建設中とのことである。地名のことが出たついでに記すが、「化石溪」の項に出てくる蘇門岳(三三頁)は現在は守門岳と記され、「龜の化石」の項に出てくる「吾が同郡岡の町」(三三頁)は牧之と同郡の魚沼郡に非ずして刈羽郡に屬する。又「夜光玉」の項中、杉尾村とあるのは(三元頁)原澤氏によれば現在の栃尾侯(或は栃尾又)である。但し栃尾侯の温泉のことは越後地名考にも既に載つてゐる。

研究部「英語研究」編輯部

附 録
目 録
第一輯
第二輯
第三輯
第四輯
第五輯
第六輯
第七輯
第八輯
第九輯
第十輯

學 報

附 録
目 録
第一輯
第二輯
第三輯
第四輯
第五輯
第六輯
第七輯
第八輯
第九輯
第十輯

新商生の集めた新潟市民俗資料 (二)

指導教諭 長谷川 正

職業

一、昔榮えた商賣

(1) 問屋、小問屋 明治初年の和船交通時代まで當市で一番榮えた商賣は問屋である。越後一圓及び近國商人の買附委託又は販賣委託を受け、報酬として規定の口錢を受けたものであるが、大問屋は本業の外に倉庫業廻漕業を兼ねてゐた。大問屋とは十三枚帆以上の遠國船を扱ふものでその数は四十八軒に限られ(天保年間に四十一軒に減じ元治年間には廿軒となる。港津の不振の爲である)てゐた。大問屋は常に港口へ手代を派し、入津船の帆影を望めば直ちに通辭船を漕ぎつけて、その積載品につき市中の相場を告げて販賣を引受け、更に買附品の斡旋をした。小問屋は十三枚帆以下の小船を扱ふもので、元祿年間には四十七軒あつたが、港勢の不振と共に次第に減じた模様である。

(2) 小宿、附船 小宿とは繫船便宜河岸に居を構へて、大問屋の爲に貨物賣買の仲介をなし口錢の分配を受けたものである。卅軒はあつたと云ふ。

附船は俗稱「うろうろ」と云ひ、河邊を彷徨して入津船舶に酒食を賣りつけ、荷役の手傳を業としたものである。又下級船員の宿所ともなつた。寛政年間その數八十二軒に達したと云ふ。小宿、附船は小規模卑賤なる職業であつたが収益多く、その

重くつく

然し商業發展し市街膨張すると共に、この不便窟窟な拘束は次第に崩れた。明治初年紙屋として有名な藤井氏が古町四の町(今の七番町萬代デパートの地)へ進出したので、紙營業の特權を有する本町商人から強硬な抗議が出た。然し新時代にはかかる封建時代の慣習は通用せず、遂に區域制は崩壊した。但し今日の町並みに往時の名残が認められてゐる事は勿論である。

三、座 商

前記商業區域の制限を受けず、獨占的特權を有する座商が當市に二軒ある。

(1) 朱座、朱墨の製造販賣に當るもので、朱座は勿論江戸に一座あるのみで、當地の朱座取次所は大川前通拾七軒町庄七なるもの一軒であつた。

(2) 秤座、榭座 秤座は度量衡製作販賣所で、全國に二座しかなかつた。當市のは江戸守隨氏の秤座に隸屬し、本町通十三番町片桐氏が、曾て守隨氏の僕たりし縁故を以て、その家業を相傳してゐた。榭座は一定の取次所なく、長岡榭役場から町會所へ取寄せ、希望者に之を販賣した。

四、女の 仕事

越後は古來女のよく働く所として有名であるが、當地に於て女の仕事として知られてゐるものを列挙してみる。

はたをり。足袋の裏底作り。蠟燭の心巻き。パテン(以上今日はなし)。針仕事。竹串作り。傘張り。魚賣。鹽上げ。小揚(帖持とも云ふ)。佐官の土ねり。よいとまげ。紙屑買ひ。

湊の 習俗

一、入津船舶と問屋 大問屋小問屋のことは前に詳述したが、入津船舶の積荷の引受分配は、何品でも全部問屋が引受け、三、四割の口錢で取扱つたから、莫大な利得があつた。

重くつく

二、荷役の順序 荷役は必ず先船から順次後船に及び、問屋は先船の荷から賣拂つた。その爲に、同じ積荷をし

ても入港の遅れた爲に莫大な損失を招いた例は多い。

三、船員の待遇 新潟の繁昌も結局は入津船船の多寡によるのであるから、問屋では舟主又は代理人を大變優待し、只管その意を損ねない様に努めた。船の出入には必ず町民の出迎見送があり、沖に碇泊した舟には、本船まで清酒鮮魚を持参して御氣遣伺ひをした。入津後は船頭衆は問屋で寝泊りをしたが、絹物づくめの大名の如き待遇を受けてゐた。

四、船員の給與、利得

(一)きりだし 船主が船員に給與する賞與をきりだしと云ふ。之は一航海毎に計算し、一年一回支給するものであるが、計算の標準は航海の難易によつて差があつた。即ち難航時は多く、平靜な航海に少なかつた。然しこれでは船員の生活の資として不十分であるから、自然次に述ぶるしんが、ほまちの類が行はれるやうになつた。

(二)しんが、ほまち 船主の積荷の外に、船員が特別に商品を買込んで之を賣却するを云ふ。しんが、ほまちは同義である。もとは秘密に行はれたが、別に船主の損害になる譯でもないの故には黙認された。云はば公然と行はれたと云つて差支へなく、又これが船員の生活費となつたのである。ほまちは何品によらず行はれたが、石狩邊に鮭の仕入れに行つた船なまでは最も盛であつた様だ。即ち船員は船主の分の外に、自費で小鮭を安く購入し、之を新潟で賈目で賣捌くので非常な利得があつた。而も彼等は、船中で自分等の買つた小鮭を、船主の大鮭と取換へるを「水を飲ます」と云ふ(が)しばしばあつたから、利益は数倍に及んだこの事である。ほまちの分配は、船頭が大抵百分の五位迄取つたと云ふ。

(三)やんつう そうめん、かたくり、砂糖、酒など、船中に積んであるものを船員が、少しづつ取出して使用するを云ふ。ほまちの如く賣捌いて利を得る譯でなく、極く僅かで、航海中の不便をしのぶ爲の罪のない仕事と云ふ可きである。

株は相當の高價であつた。(明治元年附船株一株百四十七兩)

(3)料理屋 料理屋が榮えたのは勿論湊町なるが爲で、長途の航海を終へて上陸した船頭衆は、大抵直ちに料理屋へ上つてざんちゃん騒ぎをやつたものだ。金離れのよい彼等は料理屋でも歓迎され、大旦那以上の待遇を受けた。

(4)質屋 銀行のなかつた昔は、質屋は商人の資本用金、一時の金融に利用されてなかく、繁昌した。元祿頃は二割乃至は五割の高利であつたが、それでも利用者が多かつたと云ふ。

(5)旅籠屋 新潟は古來全國的に有名な湊津であつたので、陸路海路を経て當地に集る人々はなかく多く、以つて旅籠屋は大變繁生した。地域は古二の町、三の町(今の五番町六番町)に限られ、明治初年頃迄は未だ旅舎軒を並べてゐた。「くし清」はその名残である。後年間屋附船が取引關係の荷主船員を自宅に宿泊せしむる慣習生じて、漸く旅籠屋發微の基をなすに至つた。

二、商業區域の制定

藩領時代の新潟では、各商業を夫々特定町内で營業せしむる不文律があつた。質屋、湯屋、床屋などは例外であつたが、其他の商賣は左の町割によつた。

- (1)綿木綿、絹布、綿、蔴、小間物、紙類は本町通二の町般若小路から拾七軒町風間小路まで
- (2)膳、櫛、傘物類は古町通四の町榎小路から新堀まで
- (3)材木、板類は材木町
- (4)鯨、竹、石、荒物類は他門通
- (5)魚類は本町通十四軒町
- (6)旅籠屋は古町通五、六番町

國寶新指定、百五十三點
過半数は文書、典籍、書籍類

國寶保存會總會は去る一、二日文部省會議室で開催、審議した結果國寶新指定は、建造物十六件、繪畫彫刻卅四件、文書典籍書蹟類八十一件、工藝四件、刀剣十八件合計百五十三件を決定、文書、典籍類は過半数を占めた。

次に其の中の文書、典籍、書蹟類の大部分を掲げる。○印は去る三月四日、文部省宗教局で展覧の際出陳されたものである。右の中には、本號第一頁書影巡禮に掲げた近衛首相所藏の「紙本墨書源氏物語」を初め「大牛鑑」は特に珍品である。又有有名な明の封册文「」に附を封じて日本國王と爲すに秀吉が激怒して文書をズタ／＼に裂いたと傳へられてゐた「紙本墨書明王贈豊太閤封册文」が何等の破損なく保存されてゐた。尙認定書中の紙本墨書法門百首一帖は昨年十一月發行の弘文莊待買古書目第十號に六百五十圓と出たもので反町弘文莊より現所有者保阪麟三郎氏に納まつたものである。「紙本墨書老松堂日本行録」は本郷區帝大正門前井上書店の現所藏であるが古書店所藏の書籍で國寶になるのはこれが最初である。

文書、典籍、書蹟之部

足利學校舊鈔本

四種 朽木縣 足利市

紙本墨書周易

表紙裏ニ永享九年刊行假字曆殘闕アリ

紙本墨書周易傳 三冊
卷第四ニ應安五年極月 日書寫ノ奥書アリ

紙本墨書古文孝經 一冊
紙本墨書論語義疏 十冊
○宋刊本周易注疏 十三冊
端平元年、二年陸士遠ノ奥書並ニ上杉憲忠寄進ノ記アリ

宋刊本尙書正義 八冊
上杉憲實寄進ノ記アリ

宋刊本附釋音毛詩註疏 三十冊
上杉憲實寄進ノ記アリ

宋刊本周禮 二冊
文安六年六月晦、僧延恩ノ記アリ

○宋刊本禮記正義 三十五冊
上杉憲實寄進ノ記アリ

宋刊本附釋音春秋左傳註疏二十五冊
上杉憲實寄進ノ記アリ

○宋刊本文選(金澤文庫本) 二十一冊
永祿三年北條氏政寄進ノ記並ニ九華ノ識語アリ

○紙本墨書假名法華經 八卷 同
卷第一ニ元徳二年六月廿四日句切ノ奥書アリ

紙本墨書長樂寺文書(百十五通) 七卷 群馬縣 長樂寺

○紙本墨書後深草天皇宸翰御消息(御花押) 一幅 同
(十月廿八日御花押)

○紙本墨書後小松天皇宸翰御消息(御花押) 一幅 同
(御花押)

○紙本墨書源氏物語 五十四帖 同
○大手鑑第一帖百三十九葉 二帖 同
○紙本墨書近代秀歌藤原定家筆 一帖 同
冷泉爲秀、今川貞世、近衛前久ノ奥書アリ

○紙本墨書華嚴文義要決卷第一 一卷 東京市 佐藤達次郎

紙本墨書後光嚴院宸翰御消息 一幅 同 齋藤 齊

○紙本墨書法門百首 一帖 同 保坂隣三郎

○紙本墨書老松堂日本行録 一冊 同 井上喜多郎

○紙本墨書古今和歌集 藤原定家筆 一帖 同 伊達 興宗

○紙本墨書後奈良天皇(越後國) 一卷 同 上杉 憲章

○紙本墨書後醍醐天皇(保延六年七月十一日藤原基衡願經) 十卷 同 石川 成秀

○紙本墨書金槐和歌集 一帖 同 松岡 忠良

○紙本墨書歌仙歌合 一卷 同 長尾 欽彌

○紙本墨書陽光院御筆消息(七十通) 三卷 同 小林 正直

○紙本墨書成唯識論卷第五 一卷 同 桂 五十郎

○紙本墨書正嘉三年(金澤文庫本) 一卷 神奈川縣 安藤 翔一

○紙本墨書嚴島御行幸(金澤) 一帖 同 人

○紙本墨書高倉院昇霞記(文庫本) 一帖 同 人

○大手鑑第一帖九十三葉 第二帖 三帖 新潟縣 中野忠太郎

○紙本墨書後花園天皇宸翰御消息 一幅 富山縣 瑞 泉寺

○紙本墨書無學祖元墨蹟 一幅 金澤市 内山 豊男

○紙本墨書後深草(九月十八日) 一幅 桑名市 竹内 文平

○紙本墨書五部心觀 一卷 大津市 園 城寺

○紙本墨書梵筭(十九葉) 一筭 同 同 寺

○紙本墨書三聚淨戒示(八通) 一卷 同 同 寺

○紙本墨書德圓印信之類 一卷 同 同 寺

○紙本墨書德圓三種悉地印信 一卷 同 同 寺

○紙本墨書觀世音寺公驗(保安元年六月廿八日) 一卷 同 同 寺

○紙本墨書註楞伽經卷第一 一卷 同 同 寺

○紙本墨書大光義品第十一殘闕 一卷 同 同 寺

○紙本墨書觀世音寺公驗(保安元年六月廿八日) 一卷 同 同 寺

○紙本墨書高倉天皇(十一月十三日) 一卷 同 同 寺

○紙本墨書後醍醐天皇宸翰御消息一通 一卷 同 同 寺

○紙本墨書金剛頂瑜伽經卷第一、第三卷 同 同 同 寺

○紙本墨書後醍醐天皇宸翰御消息 一幅 同 同 同 寺

○紙本墨書高倉天皇(十一月十三日) 一卷 同 同 同 寺

○紙本墨書高倉天皇(十一月十三日) 一卷 同 同 同 寺

○紙本墨書高倉天皇(十一月十三日) 一卷 同 同 同 寺

○紙本墨書高倉天皇(十一月十三日) 一卷 同 同 同 寺

○紙本墨書高倉天皇(十一月十三日) 一卷 同 同 同 寺

韌性膠素に就いて

牧 祥 之 助

日本の製本界も進歩しつゝある。方法もさうだし機構に於いても以前とは比較にならない。確に躍進的な進歩をなしつつある。と云ふことは産業としての製本の発展のみを指して云ふ場合は決して過言ではない。が然し、此進歩發展した機構内に於いて製本された書物も、先進諸國のそれと比較すると質的に非常に劣つてゐる。たとへ同一程度の質材で製本された物であつても、我國の物は構成の點で比較にならない。従つて書物の機能を充分に生かし得るやうな製本をすることは非常に困難である。彼我同一水準と行かないまでも、歩調を合して行けるやうにするためには研究改良をなすべき點が

多々あるであらうが、就中、紙葉を書物に形成する過程に最も重要な役割を擔ふ膠の研究が先決問題である。如何となれば、開閉に無理がなく快適に讀書行為を享受し、且つ書物の機能を完全に發揮し得るためには、膠の處理と書背の形態に依存する場合が多いからである。膠が先進諸國の如く背固用表紙貼り用等、各々目的に合致したものが使用されない限り完全な書物の製作されやう筈がない。韌性膠素は、筆者の友人である妻屋膠研究所主が、先進諸國の製本界に於いて背固用に必要不可欠とされるフレキシブル・グルーを、本質的には勿論のこと我國の寒暖温度等との關係に於いて、或

はまた、書籍用紙質等との具體的諸條件に於いて研究し、その長を採り、短を補ひ、初めて我國の氣候風土に適するやうに創製した純國産の製本専用膠であつて一號、二號、三號の三種に別れ、一號は固形をなし従來の膠に混合して用ゐるやうになつて居り、當該膠にフレキシブル性を附與する藥劑的役割を持つたものである。二號、三號は何れも溶性であつてそのまゝ、薄めて使用するのであるが、フレキシブル性に於いて二號が優つてゐる。韌性膠素三種を背固に使用し、従來の膠と比較試験して見るに「くさり」とび「だす」とか「背中が割れる」等の在來膠の持つ欠點が完全に除去されてあつて、開き工合に於いて西洋のものに遜色がない。無理がなく撓み均等された力の状態で自然に開く完全な膝背を作り得る。開閉を反覆するも形が崩れず、従つて「くさり」がすれ出したり背中が割れる憂ひがない。

國民と人織 (上)

ステープル ファイバー 一般使用者の爲に

省 工 商

ス・フとは何か
ステープル・ファイバー(人織)はバルブを原料としてこれに化學的處理を施し紡績に適するやうに造つた人造短纖維である。バルブを原料とする人造纖維である。又その製造方法も人造纖維と大同小異である。併し人造纖維が生糸に近い製品を得るため長い連続的のものであるのに対し、ステープル・ファイバーは棉花又は羊毛に近い製品を得るから短く切断した纖維である。兩者の相違點である。又人造纖維は一箇の紡出口(ノズル)から約三十本位紡出されるが、ステープル・ファイバーは一つの紡出口から一度に千五百本も紡出されるから能率もよく値段も人造纖維に比べて安くなるわけである。その上にステープル・ファイバーは棉花と混して紡績して糸を造る事も出来れば羊

毛と混紡して糸とする事も出来、その他色々な天然纖維、混紡纖維が可能である事、即ち多角的應用の範圍が廣いといふこと、言葉を換へれば非常に可紡性に富んで居るといふことが人造纖維より優れた今一つの長所となつてゐるのである。

特 長
一、太さ、長さ、光澤及び觸感を自由自在にすることが出来る
例へば棉 混紡する場合に太さ一・五デニール、長さ一インチ半(三・八センチ)、毛に混紡する場合に太さ三デニール、長さ三インチ(七・六センチ)、絹に混紡する場合に太さ一・五デニール、長さ八インチ(二〇・三センチ)といふ工合に混紡し最も適するものを自由に製造することが出来る。また纖維維よくなじむ性質を持つてゐるから棉、混紡す

れば棉をつくりたり、毛に混紡すれば毛をつくりたりなものになる。光澤も觸感も思ふやうに調節出来ることも大きな特徴である。
二、價格が安定性を持つてゐる
ステープル・ファイバーは季節的に生産される棉花などに比べ工業生産品であるから豐凶の差が少く又生産費中原料費の占める割合が綿などに比べから原料價格の高低に依る價格の變動が少い。
三、均齊度が高い
人工で製造するため他の天然纖維に比べて均齊度が高く、従つて實際糸になつたものを比較しても全ステープル・ファイバー糸は綿糸や毛糸に比し不率率が少ない。
四、虫食はない
全ステープル・ファイバー糸は保存にナフタリンの如き防虫劑を必要としない。
五、實用に充分な強力及び伸度を有す
強度は平均毎デニール二・三瓦で、これだけあれば織維としての強力は充分である。又その伸度は羊毛よりは小さいが棉化、麻よりは大きいのが普通で、伸度の大きなことは織布上有利でステープル・ファイバーのやうに大體一五%の伸度を有してあればこれだけで織布上充分とされてゐる。
六、夾雜物を含みぬ
羊毛又は棉花は種々の不純物を含み、これを除去に相當の手数を要するがステープル・ファイバーにはこの手数が全然不要である。
七、相當の保溫性がある
ステープル・ファイバー糸は紡績工程で特殊な構成となり糸に絶縁効果を有する微細な空腔を有するので相當な保溫性がある。
八、人體のやうな冷感を與へず保溫性も適かにこれに優つてゐる。殊に最近中空物が出来たから保溫性に就いては論議の餘地がなくなつた。
九、保潔性に富む
紫外線透過率が多いから健康上も非常に良い。

國民と人織

一般使用者の爲に

省工商

(一) 一般の誤解に答ふ

(一) 弱くない
ステープル・ファイバーが入るといかに弱くなるやうに云ふ人があるが、棉に三割位のステープル・ファイバーを混紡した製品なら商工省織造工業試験所最近の試験の結果に依ると水に侵しても強力に於て〇・七%乃至〇・九%減する程度であるから洗濯にも耐へ充分使用し得るものと認められる。又毛に二割乃至三割ステープル・ファイバーを混紡したものは乾いてあるとき純毛品よりかへつて強く湿潤時に於てもあまり強力に變りはない。

(二) 冷えない

又ステープル・ファイバーが入ると冷えると云ふ人があるが、熱の傳導度、棉と殆ど同じであるから別に冷いとは思はれない。寧ろ保温性は糸、懸具、織物の組織

起毛の程度、厚さ等織物の空気を保つてゐる程度如何に依つて決定されるものであるから、これ等の點に注意して作つた織物なら保温の程度に於て心配するほどの事はない。殊、棉に三割、毛に二割程度のステープル・ファイバーを混用したものは大丈夫である。

(三) 安くなる

ステープル・ファイバーが入ると安くなるかとよく云はれるが、毛に三割混紡したものは純毛品に比べて一割程度安くなり、全ステープル・ファイバーのものならば純毛のものに比して遙かに安く純毛品の約半値で出来ると思ふ。棉との混紡に於て、昨年来棉の異常な騰貴の結果非常に綿が安價になつた事と、ステープル・ファイバーの原料たるバルブが豊富のためロドステープル・ファイバーの方が幾分棉よりも高つくが、バル

ブが肉内で自然に出来てやうになれば、棉と同程度又はそれより安い織物が出ると思ふ。

(四) よれよれになつたのは昔のこと

ステープル・ファイバーが入るとよれよれになるやうに云ふ人がある。それはステープル・ファイバーの「研究時代(二、三年前)」に出来たモスリン等にはあつたかも知れないが、現在出来るものは非常に改良されて強力も一デニール當り一・五瓦位のものも二瓦程度にも達して居り、その十割強技術並びに織布技術も進歩したのでよれよれなる心配はない。

(五) 洗濯もさく

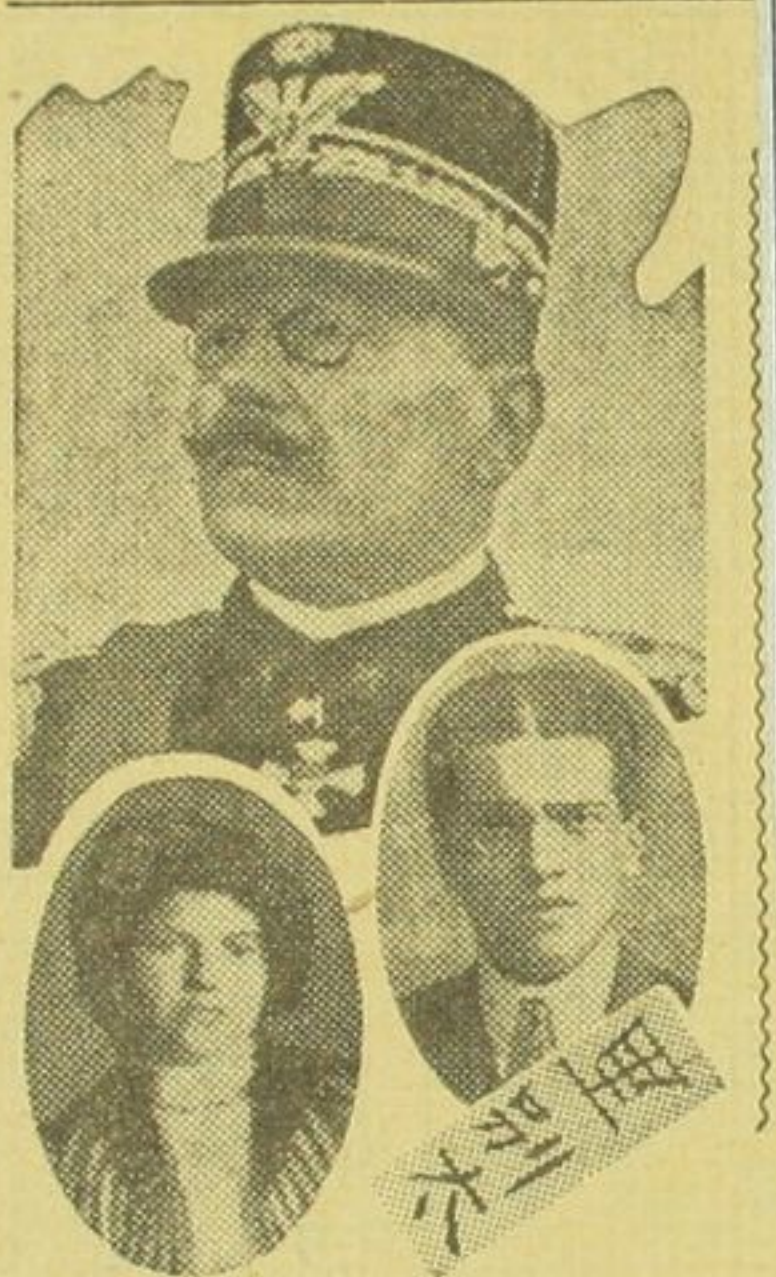
洗濯のさかぬといふ人もあるが、棉にステープル・ファイバーを三割混紡したものなら純綿のものと同様に何回もの洗濯に充分耐へ又

羊毛にステープル・ファイバーを二割乃至三割混紡したものなら純毛のものと同様に扱ひますし、毛織りはない。全ステープル・ファイバー、モスリンのごときもの洗濯には遊離アルカリの少ない石鹼(例へばマルセル石鹼)を用ひてなるべくブラッシュをあらひにし、強い日光を避け、乾燥するといつた注意をすればよい程度である。

(六) 衛生上も安全

向ステープル・ファイバー製品は衛生上悪い線にいふ者もあるが保温力も綿布と同様であり、棉にステープル・ファイバーを三割混用したものなら吸濕度も純綿布と同様に肌着にしても何等心配はいらない。たゞ子供の肌着やおむつにしても皮膚に害をなす事はない。アメリカでは全ステープル・ファイバーをガーゼ、脱脂綿等に使用してをがすことには及ばない位で、心部には及ばない。これを要するに棉に三割、羊毛に二割乃至三割程度のステープル・ファイバーを混用したものなら純綿、純毛のものと同様に値に於て變りはないから何等心配なく使用し得るのである。

合ふ及朝の
伊不利使弟
國の西のこん
人かゝる



祖先は日本人

リヴェツタ伯の夫人

日本通の里別田輝太郎——ビエトロ・リヴェツタ伯の夫人クララさんは日本人の子孫であるといふ奇しき宿命の物語について、瀧伊十五年明治四十年來親交を結んでゐる洋書家寺崎武男氏は十八日午後一行の宿舎人を待ちかねて赤坂區表町の自宅で次の如く語つた

青年、これがリヴェツタ君で、當時は里別太と書き既に日本の古典文學を研究してゐて心からの親日振りを發揮してゐました。間もなく私がウエニスに行くことになると彼は「珍らしい日本人」を紹介するといつてクララ夫人の父、トノ・キノト將軍を紹介しました。キノト將軍は當時ウエニスの聯隊長での中に歐洲大戦に參加、一九一五年の夏ウチネの野戦病院で三色旗に接吻して「余は余の凡てを祖國に捧げた、余の生命を最もよく利用し得たことに満足して死んで

行く、愛する祖國を、祖國の最も純なる表徴としての皇帝を、皇室を、而して長い年月の間愛するものと愛しく過し得た我が家庭を祝福しつゝ死んで行く……」といふ劇的な死を遂げ、皇帝はウエニスに於てキノト將軍の名を永久に傳へられることになつた程の人です。私が初対面以來實によく面倒を見て頂いて感激しました。將軍は私に「私は貴方と同じ日本人です、先祖の記録がある、貴方の手で出来れば祖先の家族を

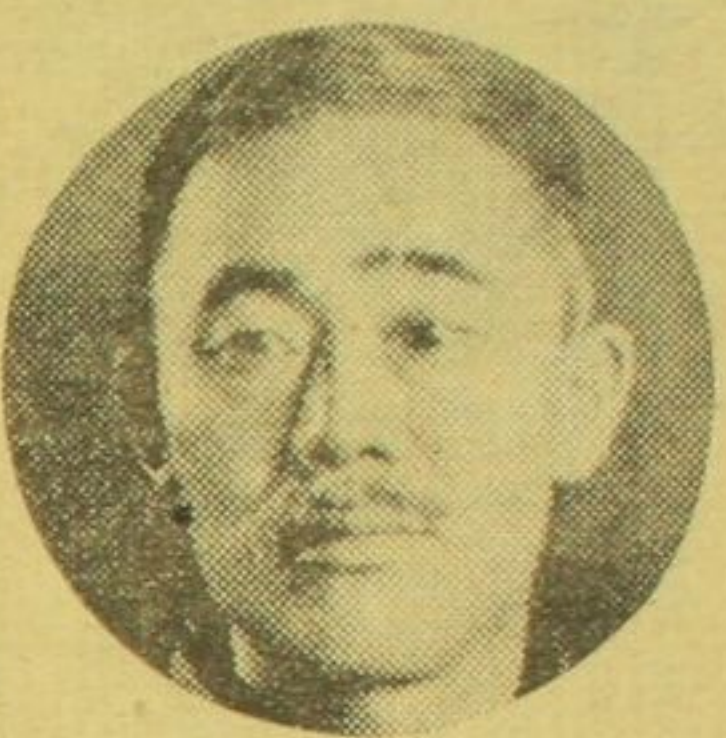
高眞(トノ・キノト) 將軍(下)リヴェツタ伯(女字は自署)とクララ夫人

九州に木ノ戸といふ兄弟がゐる兄をシンといひ弟をトモといふ、貿易に従事してゐたらしく、ある時厦門の沖合で暴風に遭ひ、船は沈没して兄弟は厦門に泳ぎつゝたが、日本に歸ることが出来ず、奴隸としてベンガル島上のニコバル島に眞珠取りに賣られ、こゝで兄のシンは死

んだが弟のトモはウエニスの商船隊に救はれ、どんなコースをどんな風に辿つたか、マルコポーロとも知り合ひになり、兎も角ウエニスに上陸、妻を買つてウエニスの郊外に永住子孫は代々武士として勇名を轟かしたといふことである

將軍は出征に際して自分は日本人の後裔として恥かしくないだけの働きをして日本人であることをを證明しよう、といふ手紙を私が貰つた程でした。リヴェツタ氏はこの將軍の愛護と結婚、日本へは初めてですが將軍に劣らぬ心からの親日家でソロゲル伯卿家の御曾子、日本は勿論十四ヶ國語に通ずる語學者で日本語に關する著述も多く、古典日本語もなかく得意です

詩歌に生くる兩勇士



詩歌、文章、報國に又國民精神總動員新瀉縣實行委員として銃後の精神運動に専心しつゝある魚川町相馬御風氏は倉林前隊東頭下保倉村大字下達武江安平軍曹、三島郡大河津村大字竹森村一上等兵の兩勇士が「七生報國」の四文を戦場の壁に血書して大捕公最後の方を再現上巻の地に華と散つた悲烈壯な行為に感服し左記の作詩をした此の詩は既に一流作曲家に作曲を依頼したが中央放送局から放送の運びとなるらしい（寫眞は相馬氏）

「七生報國」今に生く

相馬 御風

一 「七生報國」今に生く
支那上巻の戦場の
壁に残せる二勇士が
血をもて染めし四つの文字

二 壯烈誰か泣かざらん。
昭和十三如月の
春まだ過ぎ上巻の
要地固守せし小隊隊

三 多勢を待む敵軍の
猛射突撃絶え間なく
覺悟はきめし隊長の
全滅すとも退くな
死ねの號令天を衝く。

四 包圍の敵は數百倍
瀧城三日死の如し。

五 打つべき彈丸は盡き果て、
身にはいつしか十數創
わが隊いつこ目もおぼろ
迫るは敵の叫びのみ
●む刀も失せ果てぬ。

六 萬策盡きて二勇士は
土囊の壁に身を投げつ
敵の汚辱を受けむより
いでや愈き日の本の
輝く太刀をわれもてる。

七 星よと呼ばばおゝ武江
銃後の誠こもりたる
千人針の腹巻に
もろ腰固く結べかし
刺し違へんと誓ひたり。

八 江南江北幾度の
激戦敵を屠りたる
響の太刀に従谷と
刺し違へつゝ二勇士は
護國の神となりけり。

九 苦闘勇戦雲霧なす
敵をもつひに追ひ擲ひ
要地は堅く守られぬ
あゝさりなから二勇士は
つひに再び起たざりき。

十 泣きて弔ふ戦友の
涙に曇る目の前に
あゝ戦場の壁高く
血に染みつゝも見よや見よ
「七生報國」四つの文字。

十一 「七生報國」永久に生く
大捕公も泣きまさん
忠烈悲壯二勇士が
最後に示す意氣と意氣
大和魂、永久に生く。



川又家の深き時秋正中満後吹白雪
永保花紅楓 大空

